文樂の人々

昭和41年3月10日 現在

大阪中央放送局
芸能部　高木浩志 調

太　夫

目　次

豊竹　山城少掾 …… 7
竹本　綱大夫 …… 16
豊竹　若大夫 …… 23
豊竹　つぢめ大夫 …… 28
竹本　津大夫 …… 31
竹本　相生大夫 …… 34
竹本　春子大夫 …… 38
竹本　土佐大夫 …… 41
竹本　南部大夫 …… 44
竹本　文字大夫 …… 46
竹本　織大夫 …… 48
竹本　大隅大夫 …… 50
豊竹　十九大夫 …… 52
竹本　伊達路大夫 …… 53
豊竹　小松大夫 …… 54
竹本　相子大夫 …… 55
豊竹　若子大夫 …… 57
竹本　綱子大夫 …… 58
竹本　津弥大夫 …… 59
豊竹　松香大夫 …… 60
竹本　小春大夫 …… 61
竹本　源大夫 …… 62
豊竹　松島大夫 …… 63

三味線

野沢　喜左衛門 …… 64
鶴沢　寛治 …… 68
竹沢　弥七 …… 72
鶴沢　重造 …… 76
鶴沢　叶太郎 …… 78
鶴沢　燕三 …… 79
野沢　吉兵衛 …… 81
野沢　松之輔 …… 84
野沢　勝太郎 …… 87
野沢　錦糸 …… 89
鶴沢　徳太郎 …… 91
竹沢　団六 …… 93
野沢　勝平 …… 95
竹沢　団二郎 …… 96
鶴沢　清治 …… 97
野沢　勝之輔 …… 98
鶴沢　寛弘 …… 99
野沢　勝重 …… 100
豊沢　猿二郎 …… 101
豊沢　新三郎 …… 102
豊沢　仙次郎 …… 104
鶴沢　清八 …… 105

人形

桐竹　紋十郎 …… 106
吉田　栄三 …… 112
桐竹　亀松 …… 116
吉田　玉男 …… 119
桐竹　勘十郎 …… 122
吉田　玉五郎 …… 125
吉田　辰五郎 …… 127
豊松　清十郎 …… 129
吉田　簑助 …… 131
吉田　玉昇 …… 134
吉田　作十郎 …… 136
吉田　文昇 …… 138
吉田　文雀 …… 140
桐竹　紋弥 …… 142
吉田　小玉 …… 143
桐竹　紋寿 …… 144
吉田　玉幸 …… 146
桐竹　一暢 …… 147
桐竹　小紋 …… 148
吉田　玉之助 …… 149
桐竹　勘寿 …… 150
吉田　福丸 …… 151

吉田　国秀 …… 153
吉田　兵次 …… 155
吉田　享造 …… 158
吉田　常次 …… 160
吉田　菊一 …… 161

その他 …… 162

これは　局内の参考のために作成するものである。

内容は番付を追ったもので　受賞等は新聞記事、入門、その他、本人の記憶によるものや、思い出話等も加えた。

役を挙げたのは　現在に至る段階をと思ったが、充分本意を達していない。機会あるごとに充実させたい。　　乞、御教示。

寸評は　単なる私見。

なお、敬称、敬語は一切、略、　太夫の名は大夫、三味線の姓は　指定のない限り沢を用いた。

（順は不同）

豊竹山城少掾　藤原重房

本名　金杉弥太郎　明治11年12月15日生.

東京都台東区浅草馬道出身

父は筆銀といわれ、職人20余人を使う筆職で、とても芸事が好きであった。

明治14年（3才）　片岡我童（後10代仁左衛門）の弟子となり、片岡銀杏の名で舞台に出された。

明治18年（7才）　役者修業の一つとして、竹本政子大夫に義太夫の手解きを受け、後、鶴沢清道に習う。　明治18年11月、猿若座跡の文楽引越興行で「廿四孝」の筍掘りをきき、感銘を受け、白粉をぬるのさえいやであった役者をやめ、太夫になる決心をする。

明治20年1月、在京の5代竹本津賀大夫（初代古靭大夫門下　明治32年歿）に入門、竹本小津賀大夫と名のり、寄席に出演。

明治22年6月15日（11才）　父を説得して大阪に来り、片岡我当（後11代仁左衛門）の手引で2代竹本津大夫（天保10年－大正元年、竹本山城掾門下、後7代綱大夫、越路大夫の師匠に対し、庵の位置に在って、情味のある渋い上品な芸で

知られた。 得意のもの、質店、鰻谷、堀川、橋本、酒屋 等）に入門、我童の俳名芦燕に因み、竹本津葉芽大夫と名のる。

明治22年9月、 津大夫に従い 御霊文楽座へ手伝いに入る。（船場御霊神社境内西南隅 上田席と、塩鯛席とを買潰してその権利で 明治17年9月 塩鯛席に建設 ）

明治22年10月（11才）鬼一法眼三略巻 大序で御霊文楽座の番付にのる。

明治23年11月、 ひらかな盛衰記大序の他に 苅萱桑門筑紫輪 高野山の段の石童丸ではじめて床を勤め、大序を抜ける。三味線は 2代鶴沢叶であったが病気のため 鶴沢重太郎。 子供太夫が勤めるというので評判になった。

明治24年1月、 大内裏相馬錦畫、藤の棚、口 を勤め、序中語りとなる。 その三味線 野沢吉勝。

明治24年2月、 母の病気を機に東京へ戻り、子供太夫の真打で寄席へ出る。後、4代竹本播磨大夫（天保10年 ― 明治37年）一座に加入、寄席を巡る。

明治26年3月、 太夫元 神戸播半の養子となり、6月から3代大隅大夫、名人田平の東海道巡業に参加。

8月養家に入る。 養父は彦六座の再興を志していたが、11月歿、ならず。

花里が経営を引継ぎ 稲荷座と改称。

明治27年3月（16才）稲荷座開場、入座。9月迄勤め退座。

明治28年4月 金形家に復籍。 津大夫をたより、6月より文楽座出勤、先代我の鶴ヶ岡八幡宮、口、を勤める。 三味線 豊沢竹三郎。

明治30年3月 飲酒の末、舞台を忘れ、首落ち。上京して 播磨大夫の一座へ戻る。

明治33年6月 帰阪。

7月より出勤、 関取二代鑑、秋津島内 端場、三味線 鶴沢朝太郎。

明治34年9月（23才） 津大夫の油屋に対し、はじめてその中を語る。 伊勢音頭の油屋

相三味線、4代鶴沢綱造になる。

明治38年7月 ～ 明治39年2月、 修業のため九州、中国を巡業。

明治39年3月 復座、

廿四孝 諏訪明神、奥（三味線 鶴沢 綱造）
景勝上使 （三味線 豊沢豊之助）

明治39年6月限り退座

10月より 3代大隅大夫 3代清六一座に参加、北海道巡業。

打上げ後、40年1月より東京の寄席に出る。

この頃より杉山其日庵に接す。（浄瑠璃通、摂津大掾、3代大隅大夫、6代広助について極意を会得、風を重を重んじた人で、「浄瑠璃素人講釈」に詳しい）

明治40年11月　文楽座復帰、八陣の浪速入江、掛合の鞠川、三味線3代清六。

明治41年11月（30才）　日蓮記の弥三郎住家端場の時、切の津大夫の代役を勤める。

明治42年1月　その褒賞に、はじめて摂津大掾の河庄の中（口三味線）がつく。

明治42年4月（31才）　2代豊竹古靭大夫襲名（文楽座の経営　植村文楽軒の4代目より松竹に移った。第1回公演）　役場、竹の間、三味線3代野沢勝市、御殿は摂津大掾。

（3代清六を相三味線に迎える話が決って、縁のある古靭大夫の名跡が浮び、預っていた8代鶴沢三二も諒承。初代は文政10年生、明治11年横死、本格的な古格に基く情語りの名人で、酒屋質店等、世話物を得意とした。）

明治42年6月　飯原兵衛屋敷、摂津大掾の中を語り、この時より、3代大隅大夫を弾いていた3代清六を相三味線に得て、その厳しい稽古をうける。それは、3代越路大夫等も見兼ねる程の烈しさであったが、この人に大夫にして貰うのだという心で離れなかった。6代豊沢広助にもよく教えを受けた。

明治45年4月　大判事、3代越路大夫、三味線6代吉兵衛、定高、摂津大掾、雛鳥、3代南部大夫、三味線、6代広助、という大頼合せの山の段掛合の久我之助。

明治45年5月　忠臣蔵の殿中を勤めて序切語りとなる。

明治45年7月23日　師7代綱大夫歿。

大正2年6月（35才）　はじめて付物、壷坂を語る。

大正3年5月　植生村で二段目語りとなる。

大正5年10月（38才）　壬生村を勤めて三段目語りとなる。

大正6年4月　休座。

5月～12月、国内から満洲、朝鮮巡業。

なお、大正6年8月からは清六と別れ、8代野沢吉弥が相三味線となる。

大正7年1月　出座、菅原、筑紫配所、

大正7年7月　再び相三味線、3代清六に戻る。

大正8年2月　夕顔棚の時、切場3代越路大夫の、尼ヶ崎の代役を3日間勤める。

大正11年1月　付物　本蔵下屋敷。はじめて追い出し　勢揃がつく。
9日より清六休演。
大正11年1月19日　3代清六　歿す。
大正11年2月　2代豊沢新左衛門が相三味線と決り、3月の巡業よりつとめる。本公演では、4月文楽座の和泉三郎館。
大正12年1月（45才）　建白言、太功記の切場尼ヶ崎を語る。
大正12年10月　徳太郎改め　4代清六が相三味線になる。　役場　勘平切腹。
昭和5年1月　文楽座、四ッ橋に開場。（大正15年11月29日御霊文楽座全焼、昭和2年1月より道頓堀弁天座にて仮定興行。　四ッ橋畔文楽座は南区鰻谷西之町、佐野屋橋筋西入ル、近松座のあとに改築。収容850人。
昭和16年7月7日　檜下　3代津大夫　歿
昭和17年1月（64才）　文楽座檜下となる。熊谷陣屋で披露。於　四ッ橋文楽座。
昭和19年3月21日　芸術院賞授与。
昭和21年10月　芸術院会員になる。
昭和21年11月　大阪府文芸賞

昭和22年3月（69才）　秩父宮家より豊竹山城少掾・藤原重房　の称位を受領。
昭和22年6月　はじめての行幸に　重の井子別れを語る。
昭和24年10月　帝劇公演中、清六から実然袂別の申出に会い、18日千秋楽限り、27年にわたる女房役を失う。
昭和24年12月　葛の葉子別れにて　芸術祭文部大臣賞受賞。
昭和25年1月より　相三味線は10代竹沢弥七
昭和27年1月　相三味線　清二郎改め鶴沢藤蔵となる。
昭和30年1月　沼津にて　大阪市民文化賞名誉賞
昭和30年2月15日（77才）　重要無形文化財保持者に指定される。
昭和30年11月　四ッ橋文楽座最後の公演で、喜内住家を語る。
昭和31年1月　道頓堀文楽座開場、三番叟翁と十種香。
昭和31年1月　喜内住家にて因協会特賞
昭和33年11月　一力茶屋掛合の由良之助にて、大阪市民文化祭　芸術賞名誉賞
昭和33年12月4日　引退表明。

昭和34年1月（81才）　引退被露 於 道頓堀文楽座、二月堂掛合の良弁上人、渚の方、綱大夫、三味線藤蔵。

昭和34年4月　二月堂にて大阪府民劇場賞。

昭和34年11月　大阪市民文化賞。

昭和35年11月　文化功労者として顕彰。

昭和39年4月29日　勲三等旭日中授賞授与。

近代浄瑠璃の完成者。その芸は3代清六によって基礎が築かれた。それは清六を通じての、名人団平の精神で（清六が弾いていた3代大隅大夫は団平が育てた）、それが山城少掾に継承され、浄瑠璃の精髄を体得し、その上に立って山城風が確立された。

風を重んじ、読みの深い、一字一句をおろそかにしない演奏態度が、巧みな音遣いによって、みずみずしい気品と壮重さを持っていたのが山城風といわれ、それは、綱大夫、つばめ大夫らに継承されている。

昭和初期、文楽が四ツ橋に移ってからは、3代津大夫、6代土佐大夫と合せ、三巨頭時代を現出。昭和10年1月の菅原二、三、四段目切の競演、等、数々の話題や名舞台を残した。

4代清六との演奏はレコードにも沢山あり、その旺時を偲ばせる。

恩界ヶ島、直江屋敷を始め、近松の復曲も大きな業績で、その他、故事にも精通。被災前は海音の50冊をはじめ、近松の院本も推定を加え、150冊を数え、あと1、2冊で皆揃う程であった。

代表曲は、尼ヶ崎、長局、道明寺、葛の葉子別れ、熊谷陣屋、岡崎、良弁杉、合邦、善内住家、寺子屋、判官切腹、等々。

当年88才、現在は八坂神社の近辺で、酒と共に静かな余世を送っている。

経歴、芸談は、山城少掾聞書（昭和54年、茶谷半次郎）、文楽の鑑賞（昭和19年、山口廣一）等に詳しい。

8代 竹本綱大夫

本名　生田　巌　明治37年1月3日生、
大阪市西区出身

父が素人で浄瑠璃を語り、5、6才から文楽座へ聞きに行き、近所の竹本春之助という女師匠に習って竹本春尾と名のり、鈴ヶ森や裏門を語った。

明治44年8月15日（7才）　2代豊竹古靭大夫（現山城少掾）に入門、師の前名豊竹つばめ大夫の2代目を許される。

大正6年10月（13才）　仮名手本忠臣蔵　大序　2枚目で御霊文楽座の番付にのる。　師が満洲朝鮮に巡業中であったので、預けられていた7代源大夫に稽古を受けた。まだ番付にのる前　三業同志会で、3代越路大夫、3代津大夫、3代伊達大夫、6代友治郎ら大顔合せの掛合の小太郎に抜擢され、物議を醸す。

大正7年3月　妹背山、大序6枚目。

大正8年1月　日吉丸、大序9枚目

大正8年3月　千本桜　大序のほかに道行の豆くいがっき、

大正8年11月　忠臣蔵では師直を勤めたが、忠歌の段と段書きしてあるから、もう序中格といえる。

大序6年、早くて3年といわれた修業厳しい時代に、2年で早くも序中に進む。

大正11年2月（18才）　二段目切、林住家の古靭大夫の代役を勤め好評。

大正14年1月から1年半の兵役をはさみ

昭和2年1月　尼ヶ崎でも代役を勤め果す

翌月には抜擢されて、3代津大夫、6代土佐大夫、朝大夫ら大顔合せの阿古屋琴責めの榛沢の役がつく。

昭和5年2月　合邦の代役では、松竹会長から褒状と金時計を、師からは床本を贈られ

昭和6年3月　川連館の代役でも大好評を博した、実に修業の賜物である。　しかし、これも本役で起用されたのではなく、昭和になっての役場は、相合傘、妙心寺口、埴生村、中、弁慶上使、中、東天紅、陣門、田植、花渡し、鷺の森、中、身売り、脇ヶ浜、下駄場、二ツ玉、杖折檻、といったところで、若手の特別興行では、堀川、尼ヶ崎、酒屋等と、序々に起用はされたものの、上には3代津大夫、6代土佐大夫、2代古靭大夫の三巨頭をはじめ、7代駒大夫、5代錦大夫、等の先輩もあり、因習打破と松竹に対する不満や将来への憂から、義太夫の改革を目指し、

昭和11年2月（32才）　新義座を結成．勝平（現喜左衛門）をはじめ、4代南部大夫．叶美大夫（現ちばぼ）小松大夫（現つばめ大夫）　津磨大夫、越名大夫（現南部大夫）、猿糸（現チョボの岡太夫）、団二郎（現弥七）、勝芳（現勝太郎）、綱延（現錦糸）；勝之輔（戦死）12名にて文楽座脱退、巡業に出る。

相三味線は　昭和2年3月から4代野沢勝市（明治15年～昭和6年、時代物に秀れていた。）

昭和6年2月から4代豊沢仙糸（明治9年～昭和21年、繊細な中に気魂のある芸風で　世話物にすぐれた人）であったが、新義座以来　今に至る迄、団二郎一　団六一　弥七である。

6年～11年の語り物．綿繰馬、淡路町（相生大夫と一日替）　喧嘩と訴訟（相生大夫と）、茶屋場の由良助と平右衛門（相生大夫と）、掛合のお光．紙屋内．中（呂大夫と）、津大夫．古靭大夫、南部大夫らの久我之助、桃井館と裏門と花籠（呂大夫、相生大夫と）、輝虎配膳（相生大夫と）、掛合の勝頼．

昭和13年3月　芸のみを心配する古靭大夫のすすめで文楽座復帰（なお新義座は13年4月迄続く）山の定高、雛鳥は4代伊達大夫（現土佐大夫）．

三味線、団二郎（現弥七）、大判事．3代相生大夫．久我之助．お代源大夫、三味線．道八（昭和19年歿）　於．新町演舞場．

［四ッ橋文楽座はニュース映画を上映しており、文楽は北新地の比陽演舞場と新町演舞場で交替に短期公演．］

昭和13年5月（34才）　4代竹本織大夫襲名．於．四ッ橋文楽座、松右衛門内　三味線は．団二郎改め団六（現弥七）

この後の語り物．高綱物語（相生大夫）　岡崎（相生大夫）　久我之助（大判事　甲大夫、妹山は古靭大夫．伊達大夫）　瓢箪棚（呂大夫．相生大夫）、掛合の指名川．合邦（相生大夫）．長局（呂大夫．相生大夫）、楼門（南部大夫）、逆櫓（相生大夫）、林住家（相生大夫、南部大夫）．熊谷陣屋、紙屋内（呂大夫）．

鬼界ヶ島、鶴娘、重の井子別れ．道春館（相生大夫）等。　括孤内の人と一日替り、そして．

昭和19年1月（40才）　切の字を許され．合邦ではじめて番付に切がつく．

19年の役は．山科閑居．　堀川（呂大夫）．大判事、　吃又　等．

19年1月応召、　20年11月出座．

昭和22年5月（43才）　8代綱大夫襲名
於．四ッ橋文楽座．　酒屋．　三味線は団六改め
10代弥七
昭和22年6月　はじめての天覧に．道行の感信，
昭和23年5月～24年3月　組合派．
昭和27年2月　増補恋八卦．　心中重井筒　等
古典への努力が認められ．毎日演劇賞，
昭和28年4月　勘助物語で因協会賞．
昭和29年3月　河庄で因協会賞．
昭和30年2月15日（51才）　重要無形文化財保
持者に指定される，
昭和32年1月　お蝶夫人で因協会賞．
昭和32年4月　鬼界ヶ島で大阪府民劇場賞．
昭和32年12月　勘平切腹で大阪市民文化賞芸術賞，
昭和34年4月27日．28日．　松本幸四郎と歌舞
伎　文楽提携による日向島試演会．
本格の太夫が歌舞伎の舞台へ出るというので．随
分問題になったが．天保2年5月に．組大夫が歌
右衛門に首振りで景清を勧めさせた前例もあり．
嘉永年間にも．子供首振操芝居が流行して批難さ
れたが．長門大夫が．役者を人形と見做した本格
の浄瑠璃を語るのだから差支えないといったとい
う話もある。

この時も．3月24日因協会役員会で．本行を
くずさぬテストケースとして認めた。
その後．36年4月にも．中村勘三郎と四の切
を試みる．
昭和35年12月　芸阿呆（文化放送）の作曲．
演奏で．文部省芸術祭賞．
昭和35年12月　左文字と此君（日本放送協会）
の作曲．演奏で．大阪府芸術祭奨励賞．
昭和36年4月　芸術選奨．
阿古屋琴責めで．大阪府民劇場賞．
昭和38年4月15日（59才）　多年の業績に対
し．芸術院賞．
昭和40年3月　NHK放送文化賞．

山城少掾の高弟。　よくその芸風を伝える。豊かな天分に加え．厳しい本格的な修業を重ねた人で．声量も腹力もあり．イキも間もよく．時代に世話に．人物描写の的確さと情調の表現にすぐれ．風を重んじた格調ある理智的な語り口は．ますます円熟味を加え．追随を許さぬ独自の芸境をなしている．
山城少掾引退後．敢下の話もあった．
特に．重井筒（六軒町）．　天網島（紙屋内大和屋）．
冥途の飛脚（淡路町．封印切）．宵申庚（上田村）．

国性爺（楼門、獅子ヶ城）、鬼界ヶ島、鞍馬配膳、等、
近松物に対する理解の深さは、特筆すべきである。
昭和36年7月、糖尿病で入院、　37年4月～38年
1月再び入院生活を送ったが、最近はほとんど快復、
埋もれた古典の名曲の復活に意欲を燃やす。
引退した師山城への礼も欠かすことがない。
昭和39年、芸談「でんでん虫」刊行、生い立ち、修業、
先輩師匠のこと、芸談等、示唆を与えられる話が詳しい。
現在　続篇執筆中。
忠臣蔵、千本桜をはじめ、レコードも多数ある。
大正8年、伊達大夫（後6代土佐大夫）が、自費で若
い人達の勉強のために、大序会を始め、それに参加して
3代清六や　6代友次郎等に稽古をうけ、流しの技（大
正10年9月に大序会で語る、代役を勧められたのもこ
のお陰）、芝六住家、　長局　等々を憶え、大変勉にな
ったと、折にふれて口にするが、自分がそうした立場に
なった現在、40年7月から名もそのままに大序会を開
催し、弟子及び若手に勉強の機会を提供している。
斯界のために、いつまでも元気でいてほしい人である。
当年　62才。

10代 豊竹若大夫

本名　林　英雄　　明治21年5月17日生
徳島市出身

父が素人で天狗であったので、7、8才頃から
徳島の上村源之丞座の竹本島大夫に手解を受け、
10才頃、柳司と名のって　百度平住家等を語
っていた。
その後、7代吉之助（5代吉兵衛門下、明治2
年～昭和8年、　明治25年文楽退座、故郷
の淡路や神戸で稽古をしていた。後、喜造と称
す）に基礎訓練を受ける。これは　呂大夫に入
門してからも続き、神戸では内弟子に入った。
明治34年3月（13才）　　2代豊代呂大夫（安政
4年～昭和5年、芸風は西風で、吃又、沼津
等がよかった。）が、淡路来演の時入門〈吉之助が入門させてくれた〉
明治36年4月（15才）　　本名に因んで豊竹英大
夫と名のり、6月、師と共に徳島で披露、
明治41年9月、上京して竹本朝大夫一座に4枚目で
加入（2代呂大夫はスケ）、　垣生村や松王下
屋敷　大星出立等を語っていた。
明治43年9月（22才）　　御霊文楽座入座
蘇景清八嶋日記の大序、福島陣中　3枚目で番

付にのる。

明治43年10月　一谷嫩軍記　北野下の森では序中。

大序6年、序中6年といわれた修業の厳しい時代に一芝居で大序を抜けたわけだ。紋下の摂津大掾が英大夫は既に声の修業が出来ているからと異例を認めたという。ところがその後、

明治45年1月～大正2年2月　師匠大夫に従い巡業に出てしまう。

大正2年3月　御霊文楽座に復座するが、何度か巡業に出るので、永い間序中で据え置きである。

大正6年10月　桃井邸、口の時、7代源大夫の代役で殿中を語り、6代広助に褒められ、それから序々に上ってゆく。

6代広助にはよく教えを受け、寒中、浴衣でその廊下に座して厳しい稽古をしてもらったこともあるという。

大正9年2月（32才）　7代豊竹島大夫襲名

於、御霊文楽座。

花若丸切語、三味線は鶴沢芳之助（番付嶋大夫）

このあとの役々は、妹背山の蘭蔵、景勝下駄、紅葉山（相生大夫）、渡海屋、中（相生大夫）寺入り（相生大夫）、東大寺（相生大夫）、陣門

（鏡大夫）、又助住家、中（相生大夫）、

昭和になると、杖折檻（相生大夫ら）、円覚寺、中（相生大夫）相生大夫との打って替えが多い。若手の公演で合邦、袖萩祭文、宿屋等、

昭和7年3月（44才）　3代豊竹呂大夫襲名、

於、四ッ橋文楽座。

吃又、三味線は4代鶴沢叶。

切の字がつく迄の役々、括孤内の人と一日替り、盛綱陣屋（相生）、組打（相生）、逆櫓（相生）、帯屋（相生）、一力の平右衛門、紙屋内（相生）順礼歌（相生、織）、本蔵下屋敷、瓜ケ崎前、一力の由良助、西屋等々、

昭和19年1月（56才）　切の字を許され、

3月の堀川で、はじめて番付に切がつく。

その後、三和会迄の役々、重の井子別れ、順礼歌、紙屋内、新口村（織）、金殿（織）、御殿（伊達）、大判事等、

昭和23年5月　日映演大阪支部文楽座分会結成、

昭和23年10月　交渉決裂、休演、組合員77名、

昭和23年11月　神戸、大阪、布施、洲本等で公演、

昭和23年12月25日　因会発会、

昭和24年2月　合同公演、

昭和24年5月　　合同会談の上、日映翼下の組合誕生、委員長となる。

昭和25年8月19日　　劇団制をとり、三和会と改称。

昭和25年11月（6之丞）　10代若大夫襲名。

於、大阪三越劇場。

市若初陣、　三味線、4代鶴沢綱造

昭和27年4月　　合邦で因協会賞。

昭和32年1月　　志渡寺で因協会賞

昭和37年4月19日（74才）　重要無形文化財保持者に指定される。

昭和40年11月3日　　勲四等瑞宝章

相三味線は、戦後は松之輔、25年6月から4代綱造、30年から勝太郎。

三和会の役々、山科閑居、寺子屋、合邦、熊谷陣屋、堀川、すしや、酒屋、松投琵琶、御殿、宿屋、紙屋内、壺坂、十種香等々。

文楽の重鎮、重要無形文化財文楽の太夫代表。

現役太夫陣の中でも最古参であるが、重厚な芸風で、今なお驍鋒たるものである。肚が強く、声量も豊かで、素朴な豪放な語り口は、時代物の武将をよく語り生かし、

市若初陣、尼ヶ崎、寺子屋、熊谷陣屋、袖萩祭文、小牧山城中、等、時代物に傑作が多いが、埴生村、志渡寺、合邦、紙屋内、酒屋等にも味わいが深い。

とにかく、芸責めにしても、阿古屋がよくて重忠、岩永の両方が語れる太夫は、綱、若、つばめ位である。声や節というより、むしろ素朴な中に語り出す情にひきつけられる。　殊に　時代、世話、男女を問わず、熊谷、松王、袖萩等、親子の悲痛な情愛の表現には強い感動を受ける。

5之丞の時、先天的な病で視力を失い、今ではほとんど見えないが、変りなく舞台を勤められるのは、若い時からのたたき込まれた修業の賜である。　理智的な技巧的な浄瑠璃の多い中で、貴重な存在といえよう。

当年7よ才。

3代 豊竹 つぢめ大夫

本名　小出　清　大正2年1月4日生

大阪市此花区出身

4つ位から、まわらぬ舌で母の唄う長唄、端唄をまねていたという。淡路在住中、盲人の豊沢新平に順礼歌とまま炊きの二つを習い、村代表として順礼歌を語った。

大阪に出て、源福大夫の系で語ったこともある。古靱大夫に入門すべく、テストを受けたとき、友衛門の三味線でまま炊きを語ったが、田舎の師匠の手と違うので、そんな三味線では浄瑠璃は語れぬと言い張ったという。10才の時のことである。この世界には門閥といったものもなく、実力次第であるところにやり甲斐を感じ、入門を決心した。

大正13年6月（11才）　2代豊竹古靱大夫（現小城少掾）に入門、豊竹小松大夫と名のる。

大正15年4月（13才）　加賀見山旧錦絵、大序4枚目で、御霊文楽座の番付にのる。

船別れの深雪等をつとめているが、声変りまでは美声家で、艶物語りを目指していたという。

昭和11年2月　新義座に参加

昭和12年1月　太夫廃業。修業の興深さに自分

の限界を感じたという。しかし、浄瑠璃が忘れられず、再度決心して、

昭和16年9月（2ヵ月）　四ッ橋文楽座復帰、3代つぢめ大夫を襲名、十種香掛合の勝頼。三味線は鶴沢道八、

昭和19年2月　応召、20年11月出座、（道行の長右衛門）

終戦迄の役は、敦盛出陣、掛合の伝兵衛、といったところで、あとは景事物のツレ等、

戦後三和会迄、羽織落し、四條河原、掛合の重忠、帯屋、瀬尾詮議、（いづれも浜大夫と一日替り）、聚楽所前といったところ。

昭和23年5月　組合派（25年8月、三和会）

昭和27年5月　寺子屋で因協会賞、（三味線は野沢市治郎）、主として市治郎（チョボに転向）勝太郎らが弾いていたが、

昭和29年6月より、野沢喜左衛門を相三味線に得て、その薫陶を受ける。

昭和29年12月　盛綱陣屋で、芸術祭奨励賞。

昭和31年1月　廓噺で因協会賞。

昭和31年12月　近松門左衛門（朝日放送）で芸術祭奨励賞。

昭和33年12月　ほむら（日本放送協会）で、

芸術祭賞.

昭和36年1月　野崎村で因協会賞.

昭和37年11月　曽呂利咄（毎日放送）で　芸術祭奨励賞.

昭和38年1月　切の字を許される.

昭和38年11月　永映縁友綱で因協会賞.

昭和40年4月　封印切で因協会賞.

53才。　師山城風に喜左衛門の影響も加え　理智的な解釈の行き届いた浄瑠璃を語る。　技巧派である。美声でもなく　むしろ太夫としては非力な肉体的條件であるが、常に良い状態で発声するよう心掛けている。

芸を厳しく深く考え　酒屋　河庄等の陰翳ある情調の表現　新口村　等の人物描写の的確さ等に特色を発揮し　封印切　野崎村、　合邦　葛の葉子別れ　尼ヶ崎　判官切腹　等を得意とする。

一見大学教授風、　暇さえあれば口の中でツブツブと浄瑠璃を口ずさんでいる。

4代竹本津大夫

本名　村上多津二　大正5年5月14日生

大阪市北区出身

父は　3代津大夫（明治2年～昭和16年、大正13年5月から文楽座櫓下。豪快な語り口で　熊谷陣屋、　尼ヶ崎、　寺子屋　等をよくし　沼津等にも味があった）

義父は現寛治。

大正13年12月25日（8才）　父を師とし　竹本津の子大夫と名のる。

昭和7年3月（16才）　保名物狂の石川悪右衛門、で初舞台。　於　四ッ橋文楽座。

これ迄にも　力弥や放送で橋弁慶の牛若（父の弁慶）等をはじめ　道行のツレや大序にも出ていたが、正式にはこの時に披露　はじめて番付にのる。

昭和12年1月～15年9月　兵役.

昭和15年11月　文楽座復帰、　紅葉山　三味線野沢八造.

昭和16年4月（25才）　5代竹本浜大夫襲名。

於　四ッ橋文楽座、　山の段の久我之助（勝平）

大判事　3代津大夫.（病気のため4代大隅大夫）

（寛治郎）、定高、2代古叡大夫（4代清六）、
雛鳥、4代南部大夫（重造）

昭和16年7月～17年12月　応召、
この間16年5月に父3代津大夫歿、

昭和18年1月　出座、一力の平右衛門。
この時より2代古叡大夫（現山城少掾）に師事。
門弟に加わる、終戦迄の語り物、掛合の猪名川、
羽織落し、掛合の久我之助、勝頼、重忠、
毛谷村、中、合邦（古叡大夫の中）、杖折櫪（雛
大夫と一日替り）等。
戦後は、神崎揚屋（雛大夫）、四條河原（つばめ
大夫）、帯屋（つばめ大夫）、沢市内（越名大夫）
ちょんがれ（源大夫）、車曳の松王丸、夏住物語
（雛大夫）。

昭和25年4月（34才）　4代津大夫襲名、
於、四ッ橋文楽座、松右衛門内、一力茶屋の平
右衛門、
相三味線に義父寛治郎（現寛治）を得る。
この後は合邦、殿中、大判事、飯原兵衛屋
敷、引窓（切は山城少掾）、弁慶上使、堀川、
帯屋、本蔵下屋敷、新叡、苟摳り、沼津
等、

昭和27年5月　実盛物語で因協会賞、

昭和35年1月　酒屋にて因協会賞、
昭和37年1月　新叡にて因協会賞、
昭和38年1月　切の字を許される、
最近は、九郎助住家、すしや、鰻谷、日
向島、といったところ。

50才、幅のある豪放な語り口は寛治の薫陶で繊
細な味を加え、剛直な中に悲痛味の漂う時代物の武将
にうってつけで、聞くものを圧倒する。
熊谷陣屋、尼ヶ崎、寺子屋、日向島、大判事、
それに合邦、弥作鎌腹、等を得意とする。
野球、囲碁、麻雀等を好む、その体躯は一見酒豪風
だが嗜まず。
息子も太夫にしたいと、目を細めている。

3代 竹本相生大夫

本名　三輪 一郎　　明治21年7月23日生
東京都中央区出身

幼年時代　叔母より清元の三味線を習う。
15才の時　豊沢雷助（5代広助門下）より義太夫の手解きをうけ、竹本小若大夫と名のって祖父の2代相生大夫（嘉永元年～明治44年、後2代竹本綾瀬大夫、堀川、酒屋、明烏等主として艶物を得意とした）と共に口語りとして定席に出演。
祖父の養子となって三輪家に入り、義父歿後、その三味線を弾いていた野沢吉弥（明治元年～大正13年、後6代吉兵衛。3代越路大夫、2代津大夫を弾いて三味線紋下格）の世話で越路大夫に入門。

明治44年5月26日（23才）　3代竹本越路大夫、（慶応元年～大正13年、竹本摂津大掾門下。大正4年2月より文楽座紋下。　摂津大掾なきあとの文楽を背負って立った。　靖た粋な声。音遣いのうまい人で、尼ヶ崎、熊谷陣屋、寺子屋、合邦、堀川、酒屋、紙屋内等を得意とした）に入門、3代竹本越代大夫を名のる。

明治44年10月　　源平布引滝、大序3枚目で御霊文楽座の番付にのる。

大正9年5月（32才）　3代相生大夫襲名。
於、御霊文楽座。
役場は、伊賀越道中双六、大広間の段、三味線は豊沢竹三郎（後7代広助）、大正末までの役、進物場、まぐさ刈り、紅葉山（島大夫）妙心寺口（島大夫）、渡海屋中（島大夫）、寺入り（島大夫）、東大寺（島大夫）、陣門（鏡大夫）、林住家、中（和泉大夫）、
昭和になると、杖折檻（島大夫ら）、九郎助住家中（島大夫ら）、円覚寺中（島大夫）、埴生村中（つばめ大夫）、山崎街道、教妙上使、笹引、若手の会では、沼津、河庄、引窓、といったところ。
昭和10年以降、四條河原、盛綱陣屋（呂大夫）、組打（呂大夫）、逆櫓（呂大夫）、宿屋（呂大夫）、岡崎（織大夫）、帯屋（呂大夫）、平右衛門、壷坂（織大夫）、順礼歌（呂大夫、織大夫）、長局（呂大夫、織大夫）、綿繰馬（呂大夫）、寺子屋、前（文字大夫）、熊谷陣屋（織大夫）、山名屋、中将姫雪責め、中（呂大夫）、

昭和19年1月（56才）　切の字を許され.

19年2月の引窓ではじめて番付に切の字がつく.

熊谷陣屋、　毛谷村、　平太郎住家、　野崎村、

本蔵下屋敷、　いずれも呂大夫と打って替え。

終戦後、　沼津、　河庄、　逆櫓、　岩井風呂、

判官切腹、　紙屋内、　瓜ヶ崎、　埴生村、　酔

所、　小牧山城中、　甘輝館、　吃又、　三婦内、

合邦、等々。

昭和31年1月　吃又にて因協会賞、

昭和34年1月　引窓にて因協会賞、

昭和36年1月　殿中にて因協会賞、

相三味線は　道八、吉五郎（後　7代吉兵衛）

戦後は、清二郎（後藤蔵）を経て24年3月から

松之輔、　35年11月から重造。

78才。　番付を見ていると、着実に進んできた人である。そういうところは浄瑠璃にも感じられる。　担々とした地味な語り口は、年功を加え渋く落ちついた芸風。その年功で、宗岸や平作等がよくうつり、前にも滋味が感じられるが、　口説きはむしろ時代物向きといえよう。引窓、　沼津、　帯屋、　吃又、　すしや、等を好んで語る。

浄瑠璃の格は、正しく大芝居のものである。

信仰の篤い人で、心のよりどころとしており、お参りを欠かさない。

3代 竹本春子大夫

本名　坂本　竹一　　明治42年6月20日生
兵庫県三原郡出身

大正15年（17才）から竹本広竜（女師匠）に手解きをうけ、昭和2年（18才）には竹本三笠大夫（淡路第一の本太夫）に入門して、竹本三木大夫と名のって、徳島の上村源之丞座、淡路の市村六之丞座、小林六太夫座　等に出演、二枚目語りの位置で大変な人気であった。　常は鉄工所に勤めたりしていたが、地元の後援もあって

昭和15年12月（31才）　3代豊竹呂大夫（現若大夫）に入門、豊竹呂賀大夫と名のる。

昭和16年3月（32才）　野崎村のツレで初舞台。
於、四ッ橋文楽座。

昭和18年6月（34才）　松竹白井松次郎氏より一字を譲られ、初代豊竹松大夫と改名。
於、四ッ橋文楽座、　壷坂、　三味線、鶴沢道八

昭和18年10月～21年6月　軍隊、戦地でも義太夫をやった。

昭和21年8月　復帰。
戦前は、車曳の杉王、　裏門　須磨浦、　草履打の尾上、　道行のツレ　等。

戦後は掛合のお光、　志賀の里、　掛合の夕霧、
順礼歌（雛大夫と打って替え）、雷門、　雛鳥、
こあげ、　阿古屋、　狐火、　道行の小浪、
掛合の梅川、（孫右衛門、山城少掾）、　両派分裂後は、おかる（由良助、山城少掾）
土佐大夫が復帰した頃には清六が相三味線で、土佐大夫が建狂言の茶屋場のおかるを勤めても付物　十種香がつくといった扱い。

昭和27年5月～35年5月　4代鶴沢清六を相三味線に得て、その死去まで薫陶をうける。

昭和31年12月　勘平切腹にて、大阪市民文化祭奨励賞。

昭和35年1月　新口村で因協会賞。

昭和35年11月（51才）　3代春子大夫襲名
於、道頓堀文楽座、　酒屋、　勘平切腹、
相三味線は野沢松之輔となる。

昭和37年1月　鈴ヶ森で因協会賞。

昭和38年1月　天満屋で因協会賞。

昭和38年1月　切の字が許される。

57才、　土佐大夫とは又違った上品な美声の持ち主で、艶物を得意とする。

浄瑠璃も上品で、最近は情も増し円熟味が加わってきた。
御殿、十種香、吉田屋、宿屋、酒屋、順礼歌、
新口村、等を得意とする。

7代 竹本土佐大夫

本名　田邑兼吉　明治27年9月27日生
高知県長岡郡出身。
父は料理屋、父母とも義太夫を好み、7,8才から習いはじめ
18才頃から、土佐の竹本梅花に師事し、春駒
の名で素人の横綱迄なった人である。

昭和5年10月20日(36才)　6代土佐大夫(文久
3年～昭和16年、3代大隅大夫、根津大掾
門下、5代津大夫の櫓下に対し、庵の位置にあ
って、2代古靭大夫と共に三巨頭時代を現出、
洗練された艶物語り)に入門、竹本小春大夫と
名のる。

昭和6年8月(37才)　付物の十種香で初舞台、
於、四ッ橋文楽座、三味線は団六(現寛治)、
以後はこの人のために掛合の阿古屋、夕霧、
お軽、お染、八重垣姫、雛鳥、お俊、
をはじめ、道行や景事物、大井川、狐火、
そして時には、平太郎住家、新口村、巡礼歌
槍兵衛内、壺坂　等の一段が出されている。
大序から修業した人ではなく、端場も知らない
人だが、売れる太夫であったわけだ。

昭和11年6月(42才)　4代竹本伊達大夫襲名、
於、四ッ橋文楽座、宿屋、三味線6代鶴沢友次郎、

昭和16年9月　　相三味線に喜左衛門を得る。

昭和17年3月　　6代土佐大夫死去により、2代古叡大夫の門下に加わる。

昭和23年5月　　組合派、（後、三和会）

昭和29年2月　　脱退声明。

3月の三和会（その時の役　阿古屋と酒屋）に不参加。

因会に加わる。　新口村と定高、雛鳥（松大夫と打って替え）

（3月4日　三和会より出演禁止の仮処分を大阪地裁に申請。　初日出演のあと、病気と称して休演。　3月6日、大阪地裁は、3月18日迄三和会の承諾を得ず、三和会以外の舞台に出演することを禁止すると決定。　18日より出勤）

昭和32年5月（63才）　　7代土佐大夫襲名。

於、道頓堀文楽座。　酒屋、相三味線、鶴沢藤蔵となる。

昭和38年1月　　切の字を許される。

昭和38年12月　　相三味線、野沢吉兵衛となる。

72才、　いわゆる化物である。

文楽きっての美声家で、艶物を語っては第一人者、

感情の起伏や、情景の陰翳の表現に欠けても、持前の艶冶な美声で聞く者を陶酔させる。

得意の狂言に、御殿、　十種香、　新口村、　中将姫雪責、　重の井子別れ、　酒屋、　順礼歌、　平太郎住家、宿屋、等が数えられる。

5代 竹本 南部大夫

本名　大盛 二郎　大正5年3月26日生
常滑市出身

父、浦川由吉が4代南部大夫と親交があった。

昭和5年12月25日（14才）　4代南部大夫（昭和21年歿、2代越路大夫門）に入門、その前名竹本越名大夫の2代目を名のる。

昭和6年5月　車曳の杉王丸が初舞台、於、御園座。四ッ橋文楽へは7年3月、道行恋の小田巻ツレでお目見得。

昭和11年2月　新義座参加。

昭和12年　2代鶴沢寛治郎の遺言により、5代寛治家系、大盛姓を継ぐ。

昭和14年10月（23才）　文楽座復帰、道行恋の小田巻のツレ。

昭和18年3月 ～ 昭和22年7月　軍隊。
戦前は釣女の美女、酒屋、前、裏門、火の見櫓、若手の会で山名屋といったところ。

昭和21年9月　4代南部大夫死去により、4代織大夫（現綱大夫）に師事

昭和23年5月　組合派。

昭和26年3月　因会復帰、

昭和27年1月（36才）　5代南部大夫襲名。
於、四ッ橋文楽座。
竹の間、三味線、寛治郎（現、寛治）、御殿は山城少掾、十種香掛合の八重垣姫（三味線、豊助）、最近の役は雛鳥、重の井子別れ、身売り、新口村、

50才、美声家である。艶物語りといえよう。
間とか足取りに疑問は残るが、人物の語り分けにも技巧を示す。新口村、吉田屋等を好むが、むしろ時代物の方が良い。

9代 竹本 文字大夫

本名　岸本 欣一　大正13年10月28日生

大阪市北区出身

父は鶴沢友吉（道八の友松時代の門下、20才頃に廃業）祖父、鶴沢七兵衛（鶴沢勝七門下、素人の稽古をしていた、昭和5年歿）、養父、6代竹本住大夫（明治19年～昭和34年、3代越路大夫門下、軽妙、洒脱、皮肉で滋味のある語り口で、吃又、堀川、引窓、沓掛村、沼津、帯屋等を得意とした）。生れる前から養子になることが決っていた。

住大夫が太夫になることを許さなかったが、本人の強い希望で大学卒業後、

昭和21年4月1日(22才)、　2代豊竹古靭大夫（現山城少掾）に入門、豊竹古住大夫と名のる。古靭と住を合わせた名。

昭和21年8月　勧進帳の番卒で初舞台、於、四ッ橋文楽座。

昭和23年5月　組合派（25年5月　三和会）

昭和34年1月　住大夫の代役で、訴訟を勤め、因協会賞。

昭和35年1月（36才）　9代文字大夫襲名、

因会、三和会合同の道頓堀文楽座、十種香掛合の濡衣、（八重垣姫　土佐大夫、勝頼　つばめ大夫）、吉田屋（三味線は勝太郎）

昭和35年1月　笑薬にて因協会賞、

昭和39年3月　松竹琵琶で大阪府民劇場賞、

歌会では、逆櫓、笑薬、大判事、渡海屋等、最近は、井戸替、二ッ玉、すしや、茶筅酒、花菱屋、等、

42才。　よく勉強している。一寸変った声柄で、詞など養父に似たところもあるが、肚もあり、力強い。34年1月から37年4月迄の歌会では代表的存在として活躍。　織大夫と共に将来の楽しみな人。節をもっと研究してほしい。色気が欲しい、声ではない情であろうか。

5代竹本織大夫

本名　尾崎　忠男　　昭和7年2月14日生

大阪市阿倍野区出身.

父は鶴沢藤蔵（明治36年～昭和40年. 3代清六門. 7代駒大夫. 4代大隅大夫、山城少掾等の相三味線として. 雄渾にして華麗な撥捌きで知られた. その母は現若大夫の姉）

その義父が7代源大夫（明治14年～昭和10年）

昭和21年4月1日.（14才）　4代織大夫（現綱大夫）に入門. 竹本織の大夫と名のる.

昭和21年8月　　野崎村のツレ. で初舞台.

於. 四ッ橋文楽座.

昭和31年　　すしや. 瓦ヶ崎で. 文楽会勉強賞

昭和32年　　富樫で. 文楽会勉強賞

昭和37年1月　　泥場の団七で. 因協会賞

昭和38年1月（31才）　5代織大夫襲名.

於. 道頓堀文楽座. 弁慶上使. と 野崎村掛合の久松で披露. 相三味線に父藤蔵を得る.

嫩会の役. 神崎揚屋、宿屋. 定高. 川連館. 等、

最近は. 久我之助. 天満屋. 宣嘩. 景勝上使. といったところ.

34才。　34年1月から37年4月まで10回開催した若手嫩会の代表的存在として活躍。

理智的なまとまった語り口で. 師匠の鬼界ヶ島. 柳町. 瓦ヶ崎. かげ腹. 等の代役を勤めたような実力も着々と貯えている。技巧派。素朴に突込むところもほしい, 変化がほしい。これからの最も楽しみな人の一人。

5代 竹本 大隅大夫

本名　高田 峰雄　明治36年7月18日生
神戸市出身.

明治41年（5才）より、父豊沢団治（団左門下）の手解きをうけ、豊沢団子と名のる。
明治42年9月（6才）、父が台湾へ素人の稽古に行く、それに従い、素人の前座で御殿や宿屋等のクドキを語っていた。
43年から、ホンコンはじめ東南アジアに稽古や在留邦人慰問の巡業、44年再び東南アジアからイギリスに至る、大正6年（14才）帰国。
その後、書籍商をしながら~~素人の稽古をしていた~~（高田とぼけの名で素人大会に出場、大正11年安達一ッ家で入賞したりしている。（紋団治））が、豊沢団左の紹介で、
昭和5年12月20日（27才）　4代竹本大隅大夫（明治15年～昭和27年）に入門、竹本隅若大夫と名のる。父は芸道の厳しさを知っているから随分反対したという。
昭和10年1月（32才）　菅原伝授手習鑑、大序又枝目で四ッ橋文楽座の番付にのる。
これ迄に7年10月、東京で一力茶屋の亭主をはじめ、巡業では床に上っている。
戦前の役は、勧進帳番卒、桜の宮、松右衛門

内掛合の権四郎、床下、道行のツレ、等、
昭和19年2月　応徴、
昭和20年10月　出座、
昭和25年6月（47才）　2代竹本静大夫襲名
於、四ッ橋文楽座、笑薬（三味線、鶴沢友十郎）
道行の忠信（静御前は雛大夫）
昭和35年4月（57才）　5代大隅大夫襲名、
於、道頓堀文楽座、
すしや前、三味線、吉三郎（現吉兵衛）
竹の間掛合の八汐（政岡は南部大夫）
最近の役は、口三味線、雪こかし、千里竹虎狩り、等、

63才、井戸替、宝引、笑薬、等のチャリものが口に合っている、感動を支えられる浄瑠璃ではないが、場にもその特色を示す。
趣味に切手蒐集があり、ロンドン在住中から始まって、その内容は日本の切手全部1750枚、各国を合すと3万枚という大へんなもの。芸歴と同じ位古く、同じ位大切に思っている。雅号を香峰といい、絵も描く。

豊竹 十九大夫

本名　津田　進　昭和6年2月11日生
京都市上京区出身

祖父が新内の師匠をしていた。一体に芸の好きな家で18才の頃、近所の鶴沢友若について、組討、妙心寺、尼ヶ崎、等を習い、その紹介で

昭和25年11月1日（19才）　豊竹山城少掾に入門。19才だったので十九大夫と名付けられる。
現重造の父が豊竹十九大夫を名のっていたことがあるが、それとの関連はない。

昭和26年2月　寺子屋の小太郎で初舞台。
於、四ッ橋文楽座。

昭和37年1月　泥場の団七で因協会賞

昭和40年4月　瀬尾詮義で因協会賞

嫩会では、尼ヶ崎、辻法印、秋月弓之助閑居、鶴七上使、等、
最近は、拝渡し、山崎街道、宣嘩、鉄砲渡し、といったところ。

35才。声量もあり、突張りもきき、技巧派ではないが力のある語り口。やや一本調子だし、端場の足取り等疑問もあるが、時代物語りとして有望。

竹本 伊達路大夫

本名　谷口　進　昭和3年11月11日生
兵庫県三原郡出身

昭和21年（18才）頃、淡路の豊沢仙衛門について仙若と名のり、和歌山の乙女文楽と巡業していた。

昭和25年9月20日（22才）　4代竹本伊達大夫（現土佐大夫）に入門、伊達路大夫と名のり、三和会に参加。

昭和25年11月　忠臣蔵の道行のツレで初舞台。
於、大阪三越劇場

昭和29年3月　師に従い、因会へ。
嫩会では、拝右衛門内とか、真葛原　等。
最近は、寺入り、道具屋、瀬尾詮義、村上上使といったところ。

38才。粘りに乏しいが、若手の中では特異な持ち味がある。寛治等、随分厳しく稽古させている。見込みあればこそだ、これからが期待出来る。

2代 豊竹 小松大夫

本名　小西　実　昭和7年11月25日生
八尾市出身.

母が豊沢友二三。　門前の小僧というところ。

昭和29年1月15日（22才）　3代つばめ大夫に入門. その前名を名のり. 三和会参加.

昭和29年6月　三番叟のツレと　一力茶屋の仲居で初舞台, 於、東京三越劇場.

大阪へはよ月の入墨で初お目見得.

嫩会では. 笹引とか、蛍狩りを語っていた。

最近は. 笑薬. 口. 九郎助住家. 端場. 島の葉子別れ. 端場　といったところ。

34才。　淡泊な芸風である。　地道に修業しており将来が期待される.

竹本相子大夫

本名　西原　二郎.　昭和14年1月22日生
松山市出身.

9才の時. 松山で桐生大夫という老人に　先代萩のクドキ等　手解きを受け. 12才の時. 素人大会で、若駒と名のって、判官切腹を語った.

母手製の紫の着付. 緋の袴.　床本は桐生の手であった.　その年の冬には　順礼歌で受賞.

13才の冬から　野沢燕女に弁慶上使　等を習い、四国大会出場の時. 慧める人あって斯界に入る.

昭和28年9月13日（14才）　3代竹本相生大夫に入門.

昭和29年1月　赤坂並木掛合の千松.　千本桜道行のツレで初舞台.　於. 四ッ橋文楽座.

昭和31年3月　千本桜道行の忠信で因協会賞.

嫩会では　蛍狩りとか久我之助.

最近は. 一力茶屋の力弥とか. 端場、掛合の軽い役. ツレ等.

27才。　一寸声域が せまいが、変化をつけて語り込

もうとする意欲が感じられる。
地道に実力を養っており、41年1月、東京公演で師の毛谷村の代役をした。白湯汲で使えたのを語ったというが、昔なら当然のことながら、最近の20才代の人としては激賞すべきであろう。

豊竹若子大夫

本名　青木　正　昭和20年7月28日生
前橋市出身

昭和26年（6才）竹本文蝶に先代萩、等を習い、竹本小文正と名のって前橋会館で語ったこともある。東京に出て先代竹本綾之助に師事する積りで訪ねたところ、若大夫も居て、裏門をきいて入門をすすめる。

昭和27年10月1日（7才）　10代豊竹若大夫に入門、若子大夫と名のり、三和会参加。

昭和29年6月　一力茶屋の力弥で初舞台。
於、東京三越劇場。
大阪へは8月の小鍛冶の勅使道成でお目見得。
最近は姫戻りとか、五條橋の牛若といったところ。

21才。真面目な性格で芸風も素直。
現在、立教大学在学中。これからの修業に待つ、伸びる人である。

竹本 綱子大夫

本名　生田 陽三　昭和19年5月10日生
大阪市住吉区出身

父は現、綱大夫。
昭和28年8月15日（9才）　豊竹山城少掾に入門。
昭和28年10月　御殿の掛合の鶴喜代で初舞台。
政岡は師山城少掾。　於、四ッ橋文楽座。
最近の役は、進物場とか、才三勘当といったところ。

22才。　随分よく芝居を見ているし、自分でも舞踊や筝江等色々の稽古もしている。　いずれ芸の中に生きてくるだろう。　非常に恵れた立場にあるのだから、一層の稽古を望みたいところ。
今秋、初代豊竹咲大夫に改名が決っている。

竹本 津弥大夫

本名　植畑 長春　昭和7年8月28日生
大阪市南区出身

父、2代豊沢仙二郎（昭和21年歿　39才、3代豊沢広作門下）
母、豊沢源平。
祖父、6代豊沢源吉（明治17年～昭和6年、3代団平門下、6代弥大夫甥、3代団平娘婿）
曽祖父、3代豊沢団平（安政5年～大正11年　2代団平門下）。
という、生れながらにして義太夫をやりそうな家系であるが、技術を身につけたくて、いろんな仕事についた。
昭和33年12月15日（26才）　4代竹本津大夫に入門、津弥大夫と名のる。
昭和35年11月　一力茶屋掛合の仲居で初舞台。
於、道頓堀文楽座。

34才。　今は舞台では主としてツレ。嫁会や大序会で端場を勤めているが、いかにも端場語りらしい口捌きである。　まだまだこれからの人。

豊竹松香大夫

本名　勝田雅員　昭和16年4月6日生
枚阪市出身

入門に至る事情は、姉が現徳太郎の知辺であったところから。

昭和34年1月15日（18才）　豊竹松大夫（現春子大夫）に入門。

昭和35年11月　一力茶屋の仲居で初舞台。
於、道頓堀文楽座。

25才。　主として、道行のツレ等であるが、一生懸命に勤めている。
音程の不確かなのが気になるが、一にも二にも稽古というところ。

2代竹本小春大夫

本名　田邑成浩　昭和10年11月3日生
大阪市西成区出身

現竹本土佐大夫二男。
昭和32年春（22才）大学3年の時　故4代清六について小春大夫として太夫修業中スカウトされ、
33年5月、川田若三の名で、松竹「七人若衆誕生」でデビュー。　その後、東映やテレビにも出演。　36年　実業界に転向。
39年夏、綱大夫、相生大夫、寛治、喜左衛門らの前で、十種香を語り、テストを受け、文楽協会研究生となり、10月より、喜左衛門について修業をやり直す。

昭和40年4月（30才）　芦屋道満大内鑑　二人奴の葛の葉姫で初舞台。　於、道頓堀朝日座。

昭和40年10月25日　豊竹つばめ大夫に師事、

31才。　美声の持主である。まだ節を覚えるのに精一杯という感じで、肚から声も出ていないが、稽古を積んで一日も早く文土佐大夫のような艶物語りに成長してほしい人である。

8代 竹本源大夫

本名　伊藤慶治郎　明治18年12月18日生
四日市市出身

明治41年10月(23才)　7代竹本源大夫(明治14年～昭和10年)に入門、竹本源路大夫と名のる。

明治42年1月　新蓑雪物語　大序2枚目で御霊文楽座の番付にのる。但し字は源次となっている。

明治44年10月　源平布引滝で　大序シン

大正元年9月　恋女房染分手綱で　序中シン

大正4年1月　付物　艶容女舞衣の道行ツレがつき序中を抜ける。

昭和12年3月(52才)　8代源大夫襲名。
於　四ッ橋文楽座。　本蔵下屋敷。三味線は8代野沢吉弥。

昭和23年5月　組合派(25年8月　三和会)
三味線は　主として　叶太郎が弾いていた。

81才。　読みの浅い浄瑠璃である。
戦前は道行物等が多かったが、昔の修業をした人であるから　順礼歌、新吉原揚屋、弁慶上使、新口村　等で、大家から手の来る浄瑠璃を語る。

豊竹松島大夫

本名　松島安穂　明治35年3月17日生
徳島県那賀郡出身

昭和6年11月5日(29才)　2代古靭大夫(現山城少掾)に入門　豊竹松島大夫と名のる。

昭和9年11月　御園座に於ける千本桜道行のツレが初舞台。
四ッ橋は11年10月　桜の宮物狂のツレ(番付は竹本松島大夫)

昭和23年5月　組合派(25年8月　三和会)
喜左衛門に随分教えられたという。

64才。　時々しか出ないが　それも掛合の軽い役ツレ、等。　東天紅等　山城少掾から直接稽古してもらったものは　流石に一本筋が通っている。

2代 野沢喜左衛門

本名　加藤善一　明治24年6月27日生

神戸市生田区出身

養母が神戸で義太夫芸者をしていた。6才位から聞き憶えて素人の会で掛合の力弥等をつとめた。9才の時ジフテリアにかかり太夫を断念、三味線を志す。

明治33年12月25日（9才）　神戸在住の3代野沢勝市（嘉延元年～昭和11年　後初代喜左衛門）に入門、野沢勝平と名のる。

明治37年12月26日（13才）　2代鶴沢寛治郎（明治6年～昭和11年　5代寛治門下）の預り弟子となり、

明治38年1月より　3代竹本越路大夫、7代野沢吉弥、6代豊竹時大夫、2代寛治郎について巡業。

明治39年6月　見習として御霊文楽座入座。

明治39年9月（15才）　碁太平記白石噺　大序、はじめて番付にのる。

明治40年～大正2年　寛治郎宅に寄宿。

大正2年9月　半人前となる。

大正7年　中国上海巡業。

大正8年9月（28才）　本澤となる。後半の筆上2枚目

大正9年　中国上海巡業。

この頃、3代錦糸等と共に、つばめ大夫（現綱大夫）、越名大夫（4代南部大夫）、陸路大夫（七五三大夫）等を引張って、3代越路大夫や7代吉兵衛の許へ稽古に走り、越路の口上を止ビラに研声会と称して夏休み等には巡業もした。上海に迄及ぶ。

大正12年11月～昭和10年9月　7代八十大夫（後7代文字大夫　更に6代住大夫　現文字大夫養成）を弾く。

昭和11年2月　新義座に上置きとして参加。1日の大垣を振出しに巡業。

昭和~~14~~13年~~6~~4月　新義座解散。以後暫く素人の稽古等に日を送る。

昭和16年1月　文楽座復帰。本澤枠外張出し。

昭和16年9月から、4代伊達大夫（現土佐大夫）を弾く。

昭和17年11月（51才）　2代喜左衛門襲名。

亜坂（伊達大夫役場）、於、四ッ橋文楽座。

昭和23年5月　組合脱（25年8月、大阪三越第一回公演の時、劇団制をとり　三和会と称す）

昭和24年12月　御殿で、芸術祭奨励賞。

昭和29年6月より　3代つばめ大夫を弾く。

昭和29年12月　　盆綱陣屋で、芸術祭奨励賞。
昭和30年12月　　瓜子姫とあまんじゃくの作曲で
　　大阪市民文化賞。
昭和31年　1月　　廓噺で　因協会賞
昭和31年12月　　芸術選奨。
昭和31年12月　　近松門左衛門（朝日放送）の作
　　曲、演奏で　芸術祭奨励賞。
昭和32年　2月　　瓜子姫とあまんじゃくの作曲、
　　山の演奏で毎日演劇賞。
昭和33年　1月　　身売りで　因協会賞
昭和33年12月　　ほむら（日本放送協会）の作曲、
　　演奏で、芸術祭賞。
　　企上で　大阪府芸術祭奨励賞。
昭和36年　1月　　野崎村で因協会賞。
昭和37年4月19日（71才）　重要無形文化財保持者
　　に指定される。
昭和37年11月　　曽呂利噺（毎日放送）で　文部
　　省芸術祭奨励賞。　37年度大阪市民文化賞
昭和38年　1月　　水映縁友綱で　因協会賞。
昭和40年　4月　　封印切で、因協会賞。

75才。　純文楽系の三味線の最高峰。　そのやわらか

な美しい音色は　情趣溢れ　限りなき哀感を醸し出す。
蓋し絶品といえよう。　左手の良さが無類。
人物、場面、景色、等の描写にすぐれ　代表的傑作に
新口村　十種香　酒屋　御殿　阿古屋琴責め
等がある。尼ケ崎や合邦の前半も実に良い。
円満温厚な人格者として知られ　研声会　新義座をは
じめ、後進の指導に心血を注ぎ、三和会の結束にも欠
かせない存在であった。
若い太夫を弾いても　よくその人達の欠点を補ってリ
ードしていく。　古実にも詳しく　几帳面な性格。
現在　つばめ大夫相三味線。
斯界のために　いつまでも健康を保ってほしい人であ
る。

6代鶴沢寛治

本名　白井治三郎　明治20年10月17日生
京都市東山区出身

竹豊座開場以来　番付に床頭取　白井亀治郎とあるのが父。父は元素義亀鶴。弟は寛六後伊八早世。
大正6年5月以来、竹本操大夫がこれに代り、補助　白井亀治郎とある。

明治29年12月（9才）　5代竹沢団六（明治元年～昭和26年　後9代弥七　更に3代竹沢藤四郎）に入門、竹沢団治郎と名のる。

明治33年4月（13才）　2代鶴沢寛治郎に入門、鶴沢姓に改め、文楽座入座。

明治33年5月　ひらかな盛衰記　大序を勤める。於　御霊文楽座。

明治33年7月（13才）　番付にのる。（但し豊沢団次郎であり、その後も　仮名沢の間は鶴沢や竹沢になったり、名も団二郎あり、団次郎あり　因みに、明治29年4月～30年10月　稲荷座に豊沢団次郎の名があり、団次郎は豊沢の名だといわれたという。

明治38年9月　新開場の堀江座に筆上6枚目で入座。

明治39年5月　半深となる　位置は同じ。

明治40年1月（20才）　本澤　筆下4枚目（但し堀江座）

明治42年2月～9月　巡業…

明治42年11月　又堀江座出座、本澤筆下3枚目

明治43年1月限り退座。

明治43年4月（23才）　御霊文楽座復帰、6代竹沢団六襲名。摂津大掾広助　他の檀特山道行の4枚目。
十郎兵衛住家、中　叶大夫役場。　番付の位置は、枠外。半深。

明治44年7月～12月　巡業。

明治45年1月～大正3年1月　近松座へ出勤。
枠外　本澤。
竹本米大夫や　5代竹本錣大夫　等を弾く。

大正3年2月～8月　巡業。

大正3年9月（27才）　御霊文楽座、出座。枠外　半深

大正5年6月（29才）　筆上5枚目で本澤になる。
竹本淀大夫　5代竹本錣大夫、竹本静大夫、
9代竹本町大夫　竹本貴鳳大夫、竹本鏡大夫
等を弾いている。
大正8年9月より　中軸に移る。
その後、太夫は　豊竹和泉大夫、竹本小春大夫（現、土佐大夫）、7代竹本駒大夫、豊竹呂大夫（現、若大夫）　等。

昭和12年3月（50才）　3代鶴沢寛治郎襲名。

於 四ッ橋文楽座.

4代大隅大夫他の勧進帳で披露.

昭和15年10月～16年4月　櫓下の3代津大夫を弾く。

この後は 7代源大夫. 4代南部大夫 等.

昭和23年5月～25年3月　組合派.

昭和25年4月　因会 復帰. 4代目相続の津大夫を弾く.

昭和31年1月(69才)　6代寛治襲名.

於 新開場の道頓堀文楽座. 尼ヶ崎(津大夫)

吉田屋(掛合 伊達大夫 津大夫 他)

昭和37年4月19日(75才)　重要無形文化財保持者に指定される.

昭和40年11月3日.(78才)　勲四等瑞宝章.

79才。 重要無形文化財. 文楽の三味線部代表。

名実共に文楽三味線の重鎮。　非常に迫力と重量感のある芸風。 その撥捌きは 豪放の内にうっとりするような音声で 微妙な情愛を見せる.

「三味線は 太夫を殺してはいかん. 撥で弾くもんやない、ハラで弾くもんだす」 というのがこの人の信條。

一般に年をとると 世話物に傾くのを常とするが、最高

令でありながら 時代物を得意とし、その芸は人を圧す。右手の良さ無類。

傑作に 尼ヶ崎 熊谷陣屋 山科閑居 日向島 志渡寺 合邦 新口村 等がある.

厳しい稽古で知られる。 文楽系以外の色々な芸に接しているだけに 知識も豊富。 書道を趣味とする.

現在 津大夫 相三味線.

斯界のために いつまでも活躍してほしい人である.

10代竹沢弥七

本名　井上一雄　明治43年9月12日生

京都市中京区出身。

生家は先斗町で茶屋をしており、9代弥七が川を隔てて住んでいた。

大正6年2月8日（7才）　9代弥七（明治元年～昭和26年、8代弥七門下。大正10年引退。昭和22年　3代竹沢藤四郎の名で再出座）に入門、竹沢一雄と名のる。

大正7年11月（8才）　義士銘々伝、赤垣出立の胡弓が初舞台。於、竹豊座。（名大夫弥七役場）

~~大正8年1月~~　この時　竹豊座の番付にのる。

大正8年10月（9才）　3代竹沢団二郎襲名。於、竹豊座。九郎助住家の端場、糸つむぎ、竹本松重大夫役場。竹豊座閉場後は、学校に通いながら稽古だけをしていた。　卒業後、

大正12年4月　6代団六（現、寛治）に預けられて御堂文楽座入座。

3年程めし炊きもさしてもらいました。恩があります、という。

大正13年5月（14才）　番付にのる。

昭和10年11月　半深になる。

昭和11年2月（26才）　文楽座退座。　新義座に参加。　以降、2代つばめ大夫（現綱大夫）を弾く。

それで端場を弾くことが殆どなくなって　今日に至った。

昭和13年3月（28才）　文楽座復帰、妹山。

於、新町演舞場。

11年1月退座前は　半深で筆上10枚目にいたが、この時は　仮名沢の末。

昭和13年5月（28才）　7代竹沢団六襲名。

於、四ッ橋文楽座。

松右衛門内（つばめ大夫改め、4代織大夫役場）

半深となり、前の筆下4枚目。

昭和16年10月（31才）　艶谷中の時より、本澤になっている。

昭和19年2月　徴用、　この間　織大夫は清二郎（故藤蔵）が弾いている。

昭和20年11月　出座。

昭和22年5月（37才）　10代弥七襲名。

於、四ッ橋文楽座。

酒屋、織大夫改め、8代綱大夫役場。

昭和23年5月～24年5月　組合派。

昭和25年1月～26年12月　櫓下山城少掾も弾く。

昭和27年2月　増補恋八卦、心中重井筒、等、古典への努力で、綱大夫と共に毎日演劇賞。

昭和29年3月　河庄にて、因協会賞。

昭和32年4月　鬼界ケ島にて、大阪府民劇場賞。

昭和32年12月　勘平切腹にて大阪市民文化祭芸術賞。

昭和34年1月　道明寺にて、因協会賞、

昭和34年4月27、28日。　綱大夫と共に　幸四郎と歌舞伎、文楽提携による日向島試演会。

昭和34年12月　キングレコード　山科閑居にて芸術祭賞。

昭和35年12月　芸阿采（文化放送）の作曲、演奏で、芸術祭賞。

左文字と此君（日本放送協会）の作曲、演奏で、大阪府芸術祭奨励賞。

昭和36年　4月　芸術選奨。

阿古屋琴責めで、大阪府民劇場賞。

昭和40年　4月　河庄にて　因協会賞。

56才。　極めて個性的な三味線である。　粘りと深みのある、ふっくらした色気のある音色で、人物や場面の描出、情調の表現には説得力があり、その撥捌きは、運びといい、息込みといい、間といい、時代に、世話に変幻自在。

綱大夫と共に、近松の今宮心中、　女殺油地獄　豊島屋、

平家女護島　朱雀御殿、等の他　作曲も多い。

謙虚な人柄。　酒を嗜む。

最近、感銘を受けたものに、道春館、　逆櫓、　道明寺、　熊谷陣屋、　流しの枝。　合邦、　河庄、　大和屋、　堀川、等がある。

現在、綱大夫の相三味線。

4代鶴沢重造

本名、堀作太郎　明治32年1月26日生
大阪市東区出身

父は、2代豊竹呂大夫（安政4年～昭和5年、初代古靭大夫、初代呂大夫門下）

祖父は　初代鶴沢重造（明治5年歿、51才、竹沢龍造、3代清七門下、後、清龍軒と称す。

明治44年4月1日（12才）　3代鶴沢清六（明治元年～大正11年、2代鶴沢鶴太郎門下、3代大隅大夫、2代古靭大夫を弾き、6代吉兵衛6代広助と共に、文楽座の三幅対といわれた名手）に入門、4代鶴沢浅造を名のる。

大正3年2月（15才）　本朝廿四孝、狐火の琴で初舞台。於、御霊文楽座。

大正3年3月　夜名沢の末で番付にのる。

大正11年1月　3代清六死去により、6代豊沢広助（天保13年～大正13年）に預けられる。

大正13年4月　半深となり、筆下6枚目から、枠外へ出る。

昭和5年1月（31才）　筆下4枚目の位置で本澤となり、これより7代駒大夫の相三味線となる。
この時の役、竹の間。

昭和5年5月（31才）　4代鶴沢重造襲名。
於、四ッ橋文楽座。
ひらかな盛衰記、神崎揚屋、7代駒大夫役場

昭和9年～昭和14年の間に、8興行、2代古靭大夫（現山城少掾）を弾く。

昭和14年8月　3代津大夫を弾き、その後、4代南部大夫の相三味線となる。

昭和19年1月より、6代住大夫の相三味線。

昭和23年4月の花籠（羅大夫役場）を最後に退座。
11月の番付から名が消える。

昭和27年5月～29年4月、ロスアンゼルスで義大夫指導。

昭和32年～33年　ハワイへ義太夫指導に赴く。

昭和35年11月　文楽座復帰、殿中、一力茶屋。
3代相生大夫の相三味線となる。

昭和37年1月　合邦で、因協会賞。

67才。一時の鋭い間拍子というか、切先はなくなったが、やわらかな豊かな音色で文章を良く生かすスケールの大きい三味線である。
色彩間刈豆（昭和11年7月）、紅葉狩（昭和14年11月）、名和長年（昭和16年9月）末広加利（昭和17年1月）をはじめ、作曲も数曲ある。名に因み象を蒐集。
現在、相生大夫相三味線。ユーモアのある人。

初代 鶴沢叶太郎

本名　矢野　昇　明治37年9月13日生
大阪市西区出身

父が使っていた職人が鶴沢鶴次郎（明治15年生、3代清六門下、後　2代清八門下）に習っていた。その縁で、

大正2年12月1日（9才）　4代鶴沢叶（現、2代清八）に入門、叶太郎と名のる。

大正6年4月（13才）　初舞台、義経千本桜、嵯峨庵室の琴、於、御霊文楽座。

大正10年1月　夜名沢の末で番付にのる。

昭和2年10月　筆上7枚目の位置で　半深となる。

昭和13年5月（34才）　本澤、筆上6枚目。

昭和23年5月　組合派（25年8月三和会と称す）
三和会では、主として8代源大夫を弾いていた。
現在は　十九大夫、等若い人を弾いている。
叶の他に、4代豊沢仙糸（明治9年～昭和21年）に随分教えをうけた。

62才。　やわらかい音色の、古風な、骨格の大きい三味線である。　世話物、景事物が良い。　5代叶になってもおかしくない。　大夫運というべきか。

5代鶴沢燕三

本名　浜野　民男　大正3年1月5日生
大阪市浪速区出身

父母共、義太夫を好み、母などは、呂昇の弟子になろうと家出を企てたほどであったという。
才治の父が近所にいた縁で

大正13年5月（10才）　6代鶴沢才治（明治23年～昭和4年）に入門。
鶴沢才吉と名のる。この名は、5代才治も最初名のっていた。

昭和4年3月　師才治歿。　才治が6代鶴沢友次郎（明治7年～昭和26年、2代津大夫の相三味線、三味線紋下格）の預り門人であった関係で、その門下に加わる。

昭和5年3月　才吉の名、番付にのる。

昭和7年3月（18才）　鶴沢友花と改名。
保名物狂のツレ、於、四ッ橋文楽座。

昭和15年1月　半深になる、筆上9枚目。

昭和18年4月（29才）　5代燕三襲名
於、四ッ橋文楽座、双六、8代源大夫役場。

昭和21年12月限り退座。

昭和23年7月　出座、半深、枠外。

その後、組合派に属す。（25年8月 三和会と称す）
戦後は、蔵名大夫（現 南部大夫）等、
三和会になって、七五三大夫、8代源大夫、
9代文字大夫、等。
30年には若大夫も弾いている。
昭和38年1月　小鍛冶で因協会賞。
昭和40年4月　瀬尾詮議で因協会賞。
最近は　文字大夫、織大夫、十九大夫等、若い人を弾く。

52才。　やわらかな、繊細な音色で色気のある三味線である。　左手がすぐれている。世話物がよい。やや覇気に乏しいきらいがある。

9代 野沢吉兵衛

本名　川端 陸三　明治36年6月13日生
大阪市福島区出身

兄（画家）が京都に住んでおり、その近所に地唄の師匠が居た。よく遊びに行っていたが、或時、黒髪を教えられた。　初めて持った三味線で三下りの調子を直したものだから　音感が鋭いというので、1年程地唄を教えられた。

大正3年3月（11才）　7代野沢喜八郎（弘化4年～大正11年、5代友次郎門下）に入門。野沢喜代之助と名のる。

大正6年2月　絵本大功記、鷺之森ツレ、竹豊座の番付にのる。

大正7年4月　9代野沢吉王郎（明治21年～昭和25年　後、8代吉兵衛）に預けられ、御霊文楽座へ、見習として入座。

大正9年9月　御霊文楽座の番付にのる。
この頃弾いていた鏡大夫と共に　あちこちの師匠へ稽古に走ったのは勉強になったという。

大正11年6月　7代喜八郎死去。　9代吉五郎も病身であったので、4代吉三郎（明治11年～昭和17年、後、7代吉兵衛。　6代土佐大夫の

相三味線で知られた。）に預り入門。

大正12年5月（20才）　師、病気のため、代役で3代伊達大夫の長局を弾き、認められ、大序シンを飛びこして、序中に進む。

昭和8年10月　半沢になる。筆下7枚目。

昭和13年5月（35才）　本澤になる。

昭和17年2月（39才）　5代野沢吉三郎襲名。

於、四ツ橋文楽座。

吃又　6代住大夫の相三味線となる。

番付の位置は枠外。

昭和24年3月　組合派。

昭和27年3月　因会、復帰。

5代南部大夫、5代和佐大夫、2代静大夫（現、大隅大夫）、等を弾いている。

昭和38年12月　9代吉兵衛襲名。於、道頓堀朝日座。

掛合の一カ茶屋の三味線を勤め、これより7代土佐大夫の相三味線となる。

63才。手もまわり、腕も強く、音も良く、すべて備わった三味線である。

極りのある、突込んでやれる時代物向き。物事にこだわらないおおどかな性質で、それは芸風にもあらわれている。

自分でも洞ヶ嶽、五斗三番、肩屋熊谷、饅頭娘、等が好きという。7代駒大夫に局注進、田植、杉酒屋、等で大夫のイキ、三味線の呼吸を教えられた。

現在、艶物を弾くことが多くなったので、今後はそうしたものに精出すという。土佐大夫の相三味線。

初代　野沢松之輔

本名　西内重男　明治35年1月25日生
和歌山市出身

父が素人天狗で、9才から野沢太八に手解きをうけ、小豆大夫と名のり、草履打や上燗屋、等を語っていた。大正3年（12才）、同じく和歌山在住の野沢吉造に三味線の手解きをうける。

大正5年10月2日（14才）　6代野沢吉兵衛（明治元年～大正13年、3代越路大夫、3代津大夫等を弾き、三味線の紋下格）に入門、野沢吉左と名のる。

大正6年1月　御霊文楽座入座

大正8年2月（17才）　太功記、序中、鉄商の鶴沢小綱の代り役が初役となった。翌月、義経千本桜の道行ツレがつく。

大正9年9月　番付に名が出る。

この頃、野沢会といって野沢姓の三味線ばかりの会があった。（親密さにひかれ、鶴沢の2代寛治郎、4代綱造も参加していた。）

浄瑠璃の運びや間を知らねば三味線は弾けぬという師の教えで、三味線弾きが代り合って語ったり弾いたりした。野沢の家の芸をはじめ、埋もれた名曲の復曲も行ない、これが大変勉強になったという。

大正13年4月　山の段の6代友次郎の代り役を一日勤める。

大正13年6月　6代死去のため、4代吉三郎（明治11年～昭和17年　後の7代吉兵衛）の預りとなる。

昭和6年2月　半深

昭和13年5月（36才）　本澤になる。

昭和17年10月（40才）　松竹白井松次郎より一字を贈られ、野沢松之輔と改名。於、四ツ橋文楽座、自ら作詞、作曲の出陣で披露。

昭和30年12月　絃楽曲、秋の作曲で、大阪市民文化祭芸術賞。

昭和31年11月　曽根崎心中、等の作曲で因協会賞。

昭和34年　1月　引窓で因協会賞。

昭和38年　1月　天満屋で因協会賞。

相三味線を勤めた太夫、4代南部大夫、6代住大夫、昭和22年7月から3代呂大夫（現若大夫）、24年から3代相生大夫、35年11月より3代春子大夫。

64才。非凡な頭の持ち主。芸風は地味な行き方である。好きな狂言は廓噺、伏見里、吉田屋、質店等、景事がかったもの、という。

特筆すべき業績に作曲がある。夏祭泥場のメリヤスを工夫したのがきっかけで、昭和15年2月の豆まき以来西亭の名で、作詞に、作曲に、改作に腕をふるい、その数は150曲に達する。

主なものは、詰題を呼んだお蝶夫人（昭和31年）明治天皇（昭和32年）をはじめ、鳥辺山心中（昭和26年）、下田時雨（昭和32年）

近松の補訂作曲に、鑑の権三（昭和30年）、女殺油地獄上、中（昭和30年）曽根崎心中（昭和30年）長町女腹切（昭和30年）、ひじりめん卯月紅葉（昭和34年）映画、栖山節考の作曲でも知られている。

昭和29年10月、豊本節を創始、豊本豊輔と名のる。これは義太夫の普及を目指したもので、題材も義太夫物が多い。曲節は、義太夫を根本に種々の邦楽を取り入れている。

趣味は写真、事あるごとにふミリをまわしている。他に俳句、旅行。

2代 野沢勝太郎

本名　坂本芳太郎　明治45年7月1日生

大阪市南区出身

父が素人で義太夫を語り、太夫にする積りであったという。

大正13年1月15日（12才）　先代（初代）野沢勝平（現喜左衛門）に入門。野沢勝芳と名のる。

昭和5年3月（18才）　志賀の里の、八雲が初舞台。

於、四ツ橋文楽座。

これ迄にも、昭和2年御園座に於ける素浄瑠璃で鈴ヶ森を弾いている。

昭和5年10月　四ツ橋文楽座の番付にのる。

昭和11年2月（24才）　新義座、参加。

昭和14年10月（27才）　文楽座、復帰　仮名沢の末。

昭和16年10月　半沖になる。

昭和17年11月（30才）　2代勝太郎襲名

於、四ツ橋文楽座。竹生島、8代源大夫役場。

出陣ツレ

昭和19年1月　応徴後、応召。

昭和23年5月　組合派

昭和23年10月（35才）　合同の公演より本澤になっている。

昭和25年8月　劇団制をとり三和会と改称。
昭和30年3月　堀川で府民劇場奨励賞
昭和31年1月　堀川で因協会賞
昭和34年1月　志渡寺で因協会賞。

戦後は、5代雛大夫（現在チョボ）隅若大夫（現大隅大夫）等。
三和会になってからは越名大夫（現南部大夫）それから主として つばめ大夫、
27年1月から 6代住大夫、30年から若大夫も弾き、32年9月より正式に相三味線となる。

54才。現在若大夫相三味線。
種々兼備した良い三味線である。芸風は極めて端正。
芸格も大きく上品。行き方は師喜左衛門よりむしろ4代綱造に近い。堀川の後半、尼ヶ崎の後半、志渡寺等に特色を発揮する。几帳面な性格の人。

4代野沢錦糸

本名　金谷一雄　大正6年10月12日生
大阪市北区出身

父は3代錦糸（明治23年～大正15年、5、6代吉兵衛門下）
大正15年5月1日（9才）　4代鶴沢綱造（明治15年～昭和32年）に入門、鶴沢綱延と名のる。
昭和3年より勝平（現喜左衛門）の預りとなり、主としてその稽古を受ける。
昭和6年11月　沼津の胡弓が初役。
於、四ッ橋文楽座。津大夫、綱造役場で小綱、綱治と毎日替り。
昭和7年1月　番付に名が出る。
昭和11年2月　新義座に参加。
昭和14年10月　四ッ橋文楽座　復帰。
昭和17年11月（25才）　4代錦糸襲名。
於、四ッ橋文楽座。九郎助住家、口、竹本文大夫役場。出陣ツレ。
昭和18年3月　半沢となる。
昭和23年5月　組合派。
昭和23年10月　合同公演より本澤となる。
昭和26年2月　因会、復帰、訴訟。8代綱大

夫役場.

この後は 2代静大夫(現.大隅大夫). 5代雛大(現.チョボ)や. 4代伊達大夫(現.土佐大夫)等を弾く. 現在は主として. 南部大夫. それに織大夫. 文字大夫. 等.

49才. 随分俐巧な人である。
力強い中に細かいところもあり. 端正な芸風. 担々とした運び。 新口村. 宿屋. 等が好きという.
几帳面な性格で. 酒を呑む.

6代 鶴沢徳大郎

本名 坪井 沢一 大正4年8月21日生
岡山県小田郡出身.

父は鶴沢清糸といって 素人の稽古をしていた.

昭和3年5月16日(13才) 4代鶴沢清六(明治22年〜昭和35年. 初代道八門下. 檜下2代古叡大夫の相三味線を勤めていた。有吉佐和子.「一の糸」に描かれている)に入門. 鶴沢清友と名のる.

昭和5年春. 鶴沢道八(明治2年〜昭和19年 2代鶴沢吉右衛門. 2代鶴沢勝七門下. 3代津大夫. 4代大隅大夫. 等を弾く.)に預けられ. 内弟子に入る.

昭和6年2月. 彼名沢の末で番付にのる.

昭和7年夏. 清六に戻る.

昭和8年11月(18才) 若手才3回競技興行の吉田屋.口. 竹大夫. 団二郎(現.弥七)のツレが初舞台.

昭和18年2月(28才) 筆下9枚目で. 半深となる.

昭和19年5月 応徴.

昭和19年10月 出座

昭和24年2月 本深.

この頃は 織の大夫（現、織大夫）等若い人や、宮大夫（5代和佐大夫）等、中堅を弾き、4代清六のツレも多い。

昭和31年1月（41才）　6代徳太郎襲名。

於、道頓堀文楽座。　尼ヶ崎前、　松大夫（現、春子大夫）役場、

現在は、主として南部大夫、大隅大夫、等や、若い人を弾く。

51才。　腕も手も良い。　軽るやかで賑やかな音色の三味線。　弁が立ち、統率力のある人。

8代 竹沢団六

本名　白井 康夫　昭和3年9月27日生

京都市東山区出身

父は現、寛治。　6才から地唄の人について琴を習い、義太夫は13才から父に手解きをうける。

9才の頃、既に九州の巡業で、本下（4代大隅大夫、清二郎）の琴を弾いた経験もあるが、正式な入門は、

昭和18年9月1日（15才）　父を師とし、鶴沢寛子と名のる。

昭和18年10月　酒屋の琴が初舞台

於、四ツ橋文楽座。　はじめて番付にのる。

昭和19年1月（16才）　鶴沢寛弘と改名。

昭和23年5月　組合派、

昭和23年10月　半浮、

昭和25年4月　因会、復帰、

この時には、三味線はすべて本澤になっているが、この後、入門した藤二郎や、団二郎は、見習として仮名沢から出発しているから、区別がなくなった訳ではない。

昭和31年1月（28才）　8代団六襲名。

新開場の道頓堀文楽座。　狐火のツレ、三番叟

のツレ。

嫩会では、尼ヶ崎、秋月弓之助閑居、鍵七上使、等を勤めている。最近も同年輩の太夫を弾いている。

38才。昭和3年入門の徳太郎と、昭和25年入門の勝平 ― 20年程の間で、現在この人一人しかいない。父の厳しい稽古を受けており、素質も充分なだけに将来が期待出来る人である。

2代 野沢勝平

本名　加藤利雄　昭和13年6月13日生
大阪市北区出身

生家が、喜左衛門の向いで茶屋をしていた。
8才から細三味線を弾き、11才から喜左衛門に義太夫の三味線の手解きを受ける。

昭和25年1月(12才)　2代勝太郎の門下として勝平を名のり、三和会参加。

昭和26年8月(13才)　宿屋と本下の琴が初役、於、宮川町歌舞練場。

昭和35年1月　尼ヶ崎で因協会賞。

嫩会では、尼ヶ崎、笹引　芙蓉、等を勤めている。

現在、太夫は小松大夫、綱子大夫、等を弾いている。

28才。旧姓、稲山。4才位から喜左衛門の許にあり、30年、正式に養子となる。
喜左衛門から厳しい稽古を受けた人で、真面目なだけに これから先が期待出来る人。

4代　竹沢団二郎

本名　菊沢　和夫　　昭和10年12月8日生
名古屋市東区出身

母が若い頃稽古をしていた。姉（文雀夫人）につれられ、忠臣蔵を見て以来、段々好きになって、遂に

昭和28年9月10日（18才）　10代竹沢弥七に入門
4代団二郎を名のる。

昭和29年1月　三番叟と壷坂のツレで初舞台、
於、四ッ橋文楽座。　見習として番付にのる。
現在、伊達路大夫等、同年輩程度の人を弾いている。

21才。　やや三味線としては入門がおそい。それだけに色々苦労もあったと思われる。しかし、このところやや積極性に乏しい。
右手は一見師に似ているが、その実、まるで違う、直すべきであろう。

鶴沢　清治

本名　坪井　良之　　昭和20年5月6日生
大阪市南区出身

小さい頃から、6代徳太郎の許にあり、昭和30年、その養子となる。旧姓、村山 浩。

昭和28年9月1日（8才）　4代鶴沢清六に入門、
清治と名のる。

昭和29年1月　三番叟ツレ、が初舞台。
於、四ッ橋文楽座。　見習として番付にのる。

昭和35年5月　師歿後は、養父徳太郎の教えをうける。

昭和36年1月　勉強会の一力茶屋で　因協会賞

昭和39年4月　10代弥七に入門。

21才。　近畿大学在学中。　現在は、ツレとか、琴が多い。
素質があるだけに、弥七の指導の下、これからが修業というところ。

野沢勝之輔

本名　田中幸市　昭和21年8月18日生
西脇市出身

勝太郎の甥。
昭和35年3月20日（14才）　2代勝太郎に入門
昭和36年2月　紅粧信夫草　ツレ、瓜子姫とあまんじゃく　胡弓、で初舞台。於、東京三越劇場

20才。現在は、ツレとか、琴、胡弓が多いが、楽屋でも、暇さえあれば弾いている。まだまだこれからだが、伸びそう。期待出来る人。

2代鶴沢寛弘

本名　脇坂正憲　昭和23年11月15日生
宮崎市出身

祖父は実川延一郎という役者であったという。
父と鶴沢寛八（寛治門下の女義太夫）が、いとこ同志である。
昭和37年5月15日（14才）　6代鶴沢寛治に入門、寛弘と名のる。
昭和37年7月　酒屋の琴で初舞台、於、道頓堀文楽座。

18才。現在は、ツレとか、琴といったところ。何といってもまだこれから。

野沢勝重

本名　外谷　昭二　　昭和26年6月4日生

大阪市西成区出身.

家が喜左衛門の近所で、既に文楽の三味線が好きであったという。

昭和38年8月1日(12才)　2代勝太郎に入門

38年9月、文楽協会見習生となり、39年3月研究生となる。

41年2月24日、テストの結果　合格。4月1日より技芸員。

15才。　38年4月発足した文楽協会の見習生第1号。中学在学中で、初舞台もまだ、だがそう遠くはない。おとなしい少年であるが、芸の才は未だ何ともわからない。

3代豊沢猿二郎

改名の摺物には5代となっている。3代が正しいと思うが?

本名　岩崎　昇　　明治29年12月1日生

大阪市東区出身.

明治41年3月(12才)　養父6代豊沢広助(天保13年～大正13年、5代広助門下。

4代住大夫と共に、稲荷座の紋下になったこともある。文楽座でも　ハコく番付の上の仕切りの中〉に追入って、三味線紋下格。摂津大掾を弾く。　後、近衛家から、名庭絃阿弥の名をもらう)の門下として　豊沢昇と名のる。

明治42年1月　新薄雪物語、　北條成時館、が初役。　御霊文楽座の番付にのる。

明治44年9月～大正元年、　摂津大掾宅で広助の糸で須磨の浦を語り、ほめられたのがうれしくて3代越路大夫に入門、竹本児大夫と名のる。

大正4年～大正6年　豊沢松太郎に従い東京の寄席に出演。柴大夫(先代七五三大夫門下)等を弾いていた。

大正7年1月　文楽座、復座、　昇改め、3代猿二郎襲名、　於　四ツ橋文楽座。

菅原伝授手習鑑、配所のツレ、仮名沢　許外。

昭和8年10月　本澤.

昭和23年5月　組合派(後、三和会と称す)

当年70才。

3代 豊沢新三郎（しんざぶろう）

2代（襲名の摺物2代。外に2代目がないので2代が正しいと思う。）

本名　片桐富久太郎　明治31年11月18日生

大阪市南区出身

明治42年5月（11才）　2代豊沢新左衛門（堀江の"富の家"の主 富沢富治郎が父。慶応3年～昭和18年、主として非文楽系に出演、晩年2代古靭大夫の相三味線として文楽入座.）に入門、豊沢新之助（しんのすけ）と名のる。

明治43年3月　堀江座の番付にのる。新之介となっている。

明治45年1月　七福神のツレで初舞台。於.近松座。この後、身振り芝居になっても近松座出勤。

大正5年11月　身振り芝居打上げ。後の4代雛大夫、角大夫らと小屋掛興行の時、贔屓のすすめで3代新三郎襲名。出し物は櫓太鼓（やぐらだいこ）であったという。

（大正5年10月31日初日の近松座番付には、伊賀越、郡山八幡、太夫付仮名沢（かなざわ）で新之助とあり、近松座はこの時限り。）

大正6年1月12～14日　堀江座にて披露浄瑠璃会開催。㊟

大正6年2月　開場の竹豊座入座、新三郎の名で半年、枠外。4月より筆下3枚目。

大正8年1月～9年2月　休座。

大正10年1月より休座。

大正11年2月　師新左衛門、2代古靭大夫の相三味線となって御垂文楽座入座。それに伴い御垂入座。仮名沢だが枠外。9月より筆上16枚目。

昭和8年1月～18年10月　休座。新世界演舞場等に筆上3枚目で出たりしていたが後廃。

昭和18年11月　4代清六門下として再出座。三人座頭ツレ、仮名沢　枠外。

当年68才。

㊟ 浄瑠璃雑誌記載
大正6年1月12～14日 堀江座にて披露浄瑠璃会開催。
見物より旗幟一文字等沢山で気分引立つ。連日大賑い。
天稟の芸才と鍛錬の結果麒麟児を以て目される人気者。

3代豊沢仙次郎

本名　長谷清三　明治26年10月22日
大阪市南区出身

明治38年3月8日（12才）　2代猿二郎（明治9年～昭和21年、6代広助門、後、4代仏糸、模様がこまやかで間拍子が良く、景事、世話物を得意とした。）に入門。　豊沢猿吉と名のる。

明治40年9月　堀江座、入座。

明治41年1月　堀江座の番付にのる。

明治45年1月より　近松座に出勤。

大正3年5月　豊沢仙松と改名。　於　近松座。
竹本薫大夫、等を弾いている。

大正5年2月限り退座。
新世界演舞場に筆上2枚目で出座したりしている。

昭和14年11月　四ッ橋文楽座、復座。

昭和23年4月　3代仙次郎襲名。　忠臣蔵、裏門、越名大夫。　於　四ッ橋文楽座。

昭和23年5月　組合派。

当年73才。

2代鶴沢清八

本名　奥田徳松　明治12年3月11日生
大阪市南区出身。

父は骨董屋であったが、浄瑠璃を語り、三味線も弾いた。　手解きは父からうける。夕顔棚だったという。　9才、近所の鶴沢森助に習い。

明治23年4月15日（11才）　3代鶴沢鶴太郎（明治元年～大正11年、3代叶、更に3代清六、3代大隅大夫の相三味線を経て、2代古靭大夫を殺した人）に入門、2代鶴沢鶴五郎と名のる。

明治23年5月　文楽座、入座、番付にのる。

明治31年5月（19才）　本澤になる。

明治32年2月　4代鶴沢鶴太郎襲名。

大正2年1月　4代鶴沢叶襲名。

大正13年5月から、書出し

大正15年3月から、別書出し

昭和17年3月　2代清八襲名。

昭和26年2月から、ハコに入る。三味線紋下格の存在。　34年頃からだんだん出なくなった。

昭和36年11月　紫綬褒章。
兵庫県文化章。

87才。　文楽聞書（茶谷半次郎）に芸談がくわしい。

2代桐竹紋十郎

本名　磯川佐吉　明治33年11月20日生
堺市寺井町出身

兵松（5代吉田兵吉門下）について、千日前の金沢座（最近迄常盤座）で、本蔵下屋敷を見たのが動機となった。

明治42年9月（9才）　3代吉田文五郎（明治2年～昭和37年、初代吉田玉助門下、己之助、義助、3代亀松、再義助、4代文五郎、昭和32年受領吉田難波掾、芸術院会員、無形文化財保持者、文化功労者、輝かしい芸歴の持ち主、初代栄三と対照的に華やかな芸風で君臨していた）に入門、吉田小文と名付けられる。

明治42年11月　はじめて堀江座の番付にのる。小柄な子だといわれながら勤めたが、旅興行に除外されたのが子供心にくやしくて

明治43年11月限り、退座。千日前春日座の壮士芝居、縣妻吉一座に入り　磯川佐吉の名で子役を勤める。45年1月16日、春日座焼失。

明治45年3月（12才）　近松座に入る。（45年1月開場、堀江座の人々）

4月、禿しげりをはじめに、勘太郎、菅秀才、

内海繁太郎氏の本に紋十郎につき次のようにあつかい方くわしく合わせとられある。
○8才の時常盤座の演劇芝居（106）竹本雛太夫一座へ吉田長松の名で入座。
○壮士芝居のあと中村駒之助の弟子となつて中村駒之丞として歌舞伎の子役。

淵姫、安徳君、六代君、等を遣う。

大正4年1月（15才）文五郎に従い　御霊文楽座入座。

大正4年2月　番付にのる。「伊賀越」のおのち、このあとも、おつう、ちよま、千松等子役

大正6年2月（17才）吉田文昇の名で、京都に開場した竹豊座入座。
修理之助、希世、主計之助、「安達」の八幡太郎、等。

大正6年11月限り、退座。

大正7年1月　小文の名で御霊文楽座復座。
車曳の杉王丸。帰り新参に過ぎた役と非難されたが、頭取がおさめる。

大正7年3月（18才）　小文改め、2代吉田義助襲名。
於、御霊文楽座。役は、芝六住家力三作、山の腰元、花梗。
このあとは、太郎吉、三吉（大正9年6月、南部大夫、重の井の初代、栄三にも優る劇評が出た）、小四郎、等　子役でもむつかしいもの、三千歳姫、玉織姫、初菊、若葉の内侍、力弥、初花姫、等。
竹豊座では　若手としては良い役を遣つていたし、人気も出てきていたので、文楽座の役は一寸不満であった。

大正14年3月(25才)　古物大夫の浪海屋が出たとき、典侍局を申し入れ、頭取と文五郎を説き伏せて持たせてもらい、好評を得た。

大正15年の役、久松、薄雪姫、おれん、苅屋姫、八重、お袖、お鹿、等。

昭和2年1月(27才)　2代紋十郎襲名、於、弁天座。

役は、玉露、初菊、夕霧、　番付の位置は、筆上5枚目から桝外雨うたせに坐る。

これからは若手花形として、この年の役だけを見ても、先代萩、累、お筆、おたね、勝頼、顔世、壺坂のお里、立田の前、桜丸、お紺、お弓と、栄三、文五郎、玉次郎、玉七、小兵吉、冠四、政亀、玉松、等、歴々の中で序々に起用されてゆく。

このあとも、雛鳥、小浪、朝顔、糸竜、菊の前、お染、八重桐、錦祥女、梅川、桜丸、と若手花形らしい役々。

昭和7年以降、阿古屋、お徳、お光、橋立、宮城野、お初、お編、八重垣姫、道行の静御前、中将姫、等。

昭和13年6月～9月　浪満。

帰国後、塩谷判官、時姫、新口村忠兵衛、伏見里常盤御前、八百屋お七、板額、お俊、お舟、等。

昭和17年からは、操、酒屋お園、おかる、重の

井、玉手御前、戸無瀬、およね、等、文五郎が持っていた役々がつく。

昭和22年6月　はじめての天覧に、道行の静御前、

昭和23年5月　日映演、大阪支部文楽座分会結成、11月、神戸他で公演、12月改選の結果、委員長。

昭和23年12月　因会発会。

昭和24年2月　合同公演。

昭和24年5月　日映傘下に入る、組合結成。

昭和24年12月　政岡で、文部省芸術祭賞。

昭和25年8月19日　劇団側をとり、三和会と称す。

この後の役々は、挙げるに及ぶまい、人形浄瑠璃の作者が描いた、およそ女という女は、ほとんどこの人の手にかかっている。

昭和27年5月　八重桐で因協会賞。

昭和32年1月　志渡寺のお辻で因協会賞

昭和32年3月　伏見里の常磐御前で芸術選賞。

昭和32年3月　狐火の八重垣姫で大阪府民劇場賞

昭和32年4月　瓜子姫とあまんじゃくで芸術選奨

昭和32年11月　紫授褒賞。(邦楽による協調提携の範囲をひろめ、人形を通じて文楽の芸術性を高めた)

昭和32年12月　勘平で、大阪市民文化祭芸術賞。

大阪府芸術賞.

昭和32年度大阪府芸術賞.

昭和34年1月.　道明寺の菅丞相で　因協会賞.

昭和36年4月　阿古屋で　大阪府民劇場賞.

昭和40年4月20日(65才)　重要無形文化財保持者に指定される.

本年66才。重要無形文化財　人形部代表.　名実共に人形の代表.　その華麗、艶冶な芸風は　文楽の華である。　三和会を統率してきた意気は今なお盛ん。

三和会の苦労は人間的にも深みを加え、昭和30年頃からは　芸にも一段と落ちつきが加わり　キメが細かくなった。

とにかく女方は勿論、良弁上人や　勘平、治兵衛、伊左衛門、果は　十次兵衛でも盗るるばかりの色気は無類.

長唄の道成寺、藤娘を取り入れたり　新内　常磐津、清元で遣ったり、ナイトクラブへも出たり、文楽の普及に心血を注ぐ.

元々　いわゆる二枚目はもとより　弁慶や　菅丞相も持った人だが、最近は丈八や景清　貞任等にも特に意欲を燃しているが、本領はどこまでも花の多い女方。紋十郎の名は、文楽の公演に欠かせない看板といえよう。

文五郎の恩を常に忘れない。床慣の売の足で間が悪いと、随分苦しめられたのをはじめ、カスは多いがほめられたことは4回あるという.

一は、渡満の時　初代栄三が不参加となったが、現地では勧進帳を要望するので弁慶を遣ったとき　よく憶えていたというので、二は　女方の走り方が良かったというので、三は　慢心せぬ態度を、四は　因会　三和会合同公演の八重垣姫で　この品と色気こそ八重垣姫だといわれたこと。

現在　芸道60年を振り返えって　想い出話を執筆中(口述)。

2代吉田栄三

本名　荻野光秋　明治36年9月9日生

大阪市南区出身

父は2代吉田光造（昭和元年歿、70才、新町で栄寿という茶屋をしていた。玄蕃とか、どじょうに味があったが、むしろ光秀や熊谷などの卓越した左遣いとして知られている）

義母が豊竹湊玉（初代栄三の叔母）

12才の頃から、父栄寿（後光造）について、4代吉田小兵吉（明治5年～昭和20年、竹豊座時代、こたつのおさんや帯屋お絹など、文楽に入ってワキの老女方、品はないが良い腕）の一座に参加、吉田光之助の名で女太夫と巡業。

大正6年2月（14才）　父光ル（後光造）と共に、吉田光之助の名で新開場の竹豊座入座。

大正6年3月　伊賀越のおのちではじめて番付にのる小兵吉の足で修業。

安達のおきみ、芝六住家の三作、布引の太郎吉等、子役のほか、信夫や俊徳丸、勝頼、等を持つ。

大正9年1月（17才）　父と共に御霊文楽座入座、寺子屋の岩松として番付にのる。

大正9年6月　初代吉田栄三（明治5年～昭和20年、昭和2年から文楽座人形座人形座頭となり、渋い肚芸で近世人形遣いの第一人者といわれた。役柄は広く：由良助、松王、熊谷、治兵衛、尾上、合邦、等、当り役は数えきれぬ）に入門。吉田栄太郎と改名。

調姫、勘太郎、鶴喜代、等子役。

大正11年11月～大正15年8月　小兵吉について女太夫で巡業　名は吉田光之助。

この間、大正12年12月～14年9月、兵役。

大正15年9月（23才）　御霊文楽座入座、別に栄太郎という名の人がいたので、光之助の名で出勤。主として、初代栄三の足を遣って修業、昭和2年1月、紋十郎の襲名の時は、その夕霧の足を遣っていたという。

昭和12年7月　応召。

これ迄の主な役は、久松、桔梗原の唐織、修理之助、小坂部館の宗貞、道行の橘姫、刈屋姫、若狭之助、弥助、希世、浅香姫、采女之助、伝兵衛、初菊、玉織姫、等。

昭和14年11月　出座、役は信夫。

この後は、濡衣、三浦之助、重次郎、志津馬、藤の局、八重、お柳、伊左衛門、相模、猪名川、等。

昭和18年3月(40才)　3代吉田光造　襲名、

於　四ツ橋文楽座。　尾上、玉手御前、道行の小浪、　筆下4枚目から　袵外雨うたせへ、

終戦迄の役は、慈悲蔵、　八重垣姫、　宮城野朝顔、　梅ヶ枝、　中将姫、　桜丸　酒屋お園、

この間は　亀松と一日替りが多い、

葛の葉　松右衛門、　陣屋の義経(20年2月)、与次郎(20年9月)等、師の代役もよく勤めている。

戦後、襲名迄、源蔵、　おわさ、　すしやのお里、沢市、　夕霧、　弥陀六、　忠兵衛、　八重垣姫、実盛　等々、

昭和25年4月(47才)　2代吉田栄三襲名、

於　四ツ橋文楽座。　八重垣姫、　政岡　重兵衛、　平右衛門で披露。　番付の位置は　中軸から、袵外張り出しへ

この後の役、玉手御前、　塩谷判官、　こたつの治兵衛、　政岡、　封印切の忠兵衛、　お谷、勘平、　錦祥女、　重の井、　忠信　阿古屋等々、

昭和31年1月、　近松作品の諸役で、因協会賞、

昭和37年4月　春日村のしのぶで　因協会賞、

昭和40年4月　封印切の忠兵衛で　因協会賞、

63才。　首が一寸左へ傾いているのが特徴。

人形に一沫の淋しさが漂い、受賞対象にもなった近松の　おさい、河内屋与兵衛、紙屋治兵衛、等、運命に左右されるような人物とか、やや弱い性格の人物の描出にすぐれている。

初代栄三の足、左で修業してきた人で、挨拶達使等も良いが、ここに特筆すべきは　初代栄三の芸の伝承であろう、神崎揚屋の梅ヶ枝、葛の葉、等、栄三の持役として、文五郎も遣わなかった役の継承の点では、掛替のない存在である。

最近は、人間的にも安定、芸を大切に考えている。

4代桐竹亀松

本名　岩田作太郎　明治38年12月10日生
大阪市浪速区出身

家が文五郎の近くで、娘と学校友達で、それにつれよく楽屋にも出入した。

大正5年2月1日（11才）　3代吉田文五郎（後、難波操）に入門、吉田文作と名のる。

大正7年1月　番付にのる。

大正7年11月（13才）　紙屋内の勘太郎が初役、
於、御霊文楽座。
このあとは、善太、槌松、堀川のおつる、安徳君、太郎吉、等子役。子役の他に各段の足がつき、幕間は小道具等の他、師匠の用事をいいつけられ、大序から打ち出し迄、休む間がなく、毎朝持ってくる弁当を、そのまま持ち帰える毎日だった。
序々に左も修業、

昭和2年1月～3年12月　矢役、

昭和4年1月（24才）　出座、　原小文治、
昭和10年迄の役々、久松、佐太村のはる、修理之助、初菊、若葉の内侍、俊徳丸、
この間に着々と実力を貯え、松屋町にあった寄席（女太夫）で、政岡や中将姫、等を遣い、

実力養成にはこの上ない修養となった。
11年以降、佐太村の八重、弥助、浮舟、重次郎、荒屋源七、お染、勝頼、小金吾、弁慶上使の弁慶、等。

昭和17年2月（37才）　4代桐竹亀松襲名、
於、四ツ橋文楽座、三番叟と道行のお三輪、
番付の位置は筆下5枚目から、枠外両うたせ、
なお、戦後は中軸、分裂後書出し
終戦迄の役、お紺、吃又おとく、相模、八重垣姫、新口村忠兵衛、お光、伝兵衛、朝顔、操、桜丸、慈悲蔵、弥作、宗岸、紙屋内のおさん、布引の瀬尾、伊左ェ門等と、巾広い。

昭和20年7月、応召、すぐ終戦。

昭和20年10月　出座、
戦後の役々、酒屋のお園、お谷、定高、相模、千代、政岡、八重垣姫、お三輪、夕霧、阿古屋、岩根御前、八汐、弥助、治兵衛、勘平、判官、与次郎、弥陀六、金藤次、平右衛門、濡髪、とやはり広範囲、

昭和36年1月　勘平で　因協会賞、

昭和38年1月　八重垣姫で、因協会賞、

61才。　芸熱心な人。　阿系になって修業してきたというが、文楽の好きなこと、人後に落ちず。まだ正式入門前の大正4年11月、揚幕で見ていると、何も知らぬのに　いきなり大序の師直の足を持たされ、袴さばきが悪いと、門造から膝を蹴られた。丸で教えもせず蹴る理不尽に逃げ出した。

入門から1年の間に15回程やめたが、楽屋から迎えが来る度に帰参した。　既に文楽にとりつかれていた訳だ。その度に、何くそと頑張る。

挙げた役々を見てもわかる様に、何でも遣える人である。自分では、酒屋、毛谷村のお園、八重垣姫　等が好きというが、立役の構えは良く、天河屋　等　高く評価したい。　人形のこしらえはきっちりしている。動きにやや荒さがあり、間も絶妙とはいえないが、やはり人形の大御所として、得難い人である。

性格は　竹を割ったようにさっぱりした人。

初代吉田玉男

本名　上田　末一　　大正8年1月7日生

大阪市浪速区出身。

夜学へ通い、昼は会社勤めをしていたが、近所の玉幸（後、3代玉助）にすすめられ、学閥もなく、実力本位で進める世界と見極め、飛込む。

昭和8年3月5日（14才）　吉田玉次郎（昭和17年歿、69才。2代玉造門下、元来荒物遣い、晩年は書出しの位置にあって、平作、宗岸、孫右衛門　等に腕を示した、人形頭取）に入門、玉男と名のる。

昭和8年5月　　四ツ橋文楽座の番付にのる。

この頃、3度位やめた。当時の巡業では、早朝から深夜迄用事をいいつけられ、ほとんど寝られず、食物もろくに食べられない、それがつらかった。

昭和9年3月（15才）　和田合戦の佐々木綱若が初役、於、四ツ橋文楽座。

玉次郎が初代栄三と義兄弟の仲であったので、3年位は栄三の部屋にいて、足の修業をはじめ色々その教えを受ける。

昭和15年2月～18年4月　　兵役。

昭和19年4月　　応徴後、応召。

昭和21年11月　　復座。

戦前は、半七、妻女之助、等の他、女の役も多い。

戦後は、3代吉田玉助の左で勉強、2代玉市の左も遣い、故実そのほか多くを学び取っている。

役は、橋本の与五郎、俊徳丸、雅楽之助、若狭之助、早瀬、戸浪、といったところ、

因会になってからは、筆上2枚目の位置で、源太若男の役が多い。主なものを列挙すると、弥助、長右衛門、久我之助、新口村忠兵衛、久松、伝兵衛、陣屋の義経、勝頼、文三郎、茨屋源七、阿曽次郎、狐忠信、三浦之助、こたつの治兵衛、曽根崎心中の徳兵衛、等々。

昭和30年3月　　曽根崎心中の徳兵衛で、大阪府民劇場賞。

昭和31年12月　　若狭之助、お石で、大阪市民文化祭奨励賞。

昭和36年1月　　岩永で、因協会賞。

昭和40年4月　　布引の瀬尾で、因協会賞。

昭和41年3月　　瀬尾で、大阪府民劇場賞奨励賞。

玉助歿後は、保名、宵庚申の半兵衛、等に加え、由良助、松右衛門、権太、等。

当年47才。品格があり、上品な色気のある端正な芸風。頃に肩から腕の線に貫目が加わってきた。これからの文七、孔明、検非違使、等での活躍が期待される。

理論に基ずく勉強家である。新作でも人形を持つ前に会得してしまっている。細かい計算に基づいて考えた演技をする。その為、器用な人ではないだけに、間のおくれることがあるが、相手役のやりよい様にも常に心がけている。師玉次郎の名跡は、性名判断でよくないらしく、玉男で居て、晩年玉翁とでも字を変えますかと笑っている。

将棋が趣味。南海ファンというのもこの人らしい。

2代桐竹勘十郎

本名　宮永　豊　大正9年1月5日生

唐津市出身

吉田文枝（文五郎門下　後、亀松門下となり、亀三　現在廃業）が近所で、一緒に見にゆき魅了された。

昭和7年12月25日（12才）　2代桐竹紋十郎に入門、桐竹紋昇と名のる。

昭和8年2月　番付に名が出る。

昭和8年7月　桔梗原の峰松が初役、於、東京劇場。

昭和19年9月　応召。直前の役々は、八陣の主計之助、車曳の杉王丸、碁指子の落武者、引窓の三原伝蔵、といったところ。

昭和20年11月　出座。

戦後の役は、佐太村の梅王丸、赤下の節之助、鬼界ヶ島の丹波少将、久松、半七、時次郎、伝兵衛、等。

昭和23年5月　組合派（後、三和会と称す）

昭和26年6月（31才）　2代勘十郎襲名。

於、東京三越劇場。すしやの権太、沼津の重兵衛、等で披露。

三和会での役は、団七、吃又、平右衛門、三浦之助、源蔵、十次郎、伊左衛門、弥陀六、こたつのおさん、戸無瀬、と幅広く活躍。

昭和31年1月　毛谷村の六助で　因協会賞。

昭和36年1月　勝頼で、因協会賞。

文楽協会発足後の役々は　権太、六助、上田村平右衛門　孫右衛門、等である。

当年46才。間がよく、勘がよく、随分器用で舞台度胸のある人。光秀、六助、平右衛門、等、荒物、丈八、等、チャリに特色を発揮する。猿舞太郎、等陀羅助を持っては当代一といっても良い。これからは碁一も廻ってきそう。

修業時代、4代玉造、等、男の足も持ったが、紋十郎等女の足の方が多かった。それでいてシンは立役がつくのだから、まして三和会になっては並々ならぬ努力があったと思う。やや人形に色気が乏しく、手数の多さも加え、いわゆる二枚目のうつらぬ人である。

器用さは達筆でも知られ、一寸色紙に書く絵にも味わいがある。

酒豪で、腹を割って話せる人だから、若い人々にも慕われている。

現在、小割（役が決ると　その左遣い　足遣い　ツメ

人形の役割、かいしゃく、等の決定をするのは、玉男と
この人が勤めている。

2代吉田玉五郎

本名　山下政市　明治42年7月23日生
徳島県名東郡出身

徳島在住中は見るだけであった。大阪へ来てから、近所に2代吉田玉市がいて、その世話で、

大正14年1月1日(16才)　2代吉田簑助(現紋十郎)に入門。吉田小文の2代目を名のる。

大正14年1月15日初日の　新京極の文楽座での菅秀才が初役。

このあとも、新京極文楽座では子役を持っている。

大正15年9月　御霊文楽座の番付にのる。

昭和2年2月(18才)　桐竹紋三郎と改名。
役は鶴喜代君、於、弁天座。

昭和2年10月　桐竹紋司と改名。役は売しげりと小三郎、於、弁天座。

小柄な人であるので、この後も、調姫、菅秀才、鶴谷おはん、順礼歌、堀川のおつる、等、子役が多い。　文五郎の足、左で修業。

終戦迄の重な役は　三勝　狐の井、佐太村はる、玉織姫、信夫、葛の葉姫　浅香姫、初菊　早瀬、藤の局、濡衣、桐の谷、葵御前、刈屋姫、初花

姫、三千歳姫 といったところ。

昭和22年6月。　はじめての天覧に 重の井子別れの三吉を勤める。

昭和24年3月。　3代文五郎に師事、文五郎最後の舞台となったお駒をはじめ、政岡、お軽、等 文五郎の代役も多い。

昭和26年1月(42才)　2代玉五郎襲名。
於 四ツ橋文楽座。 山の雛鳥、(大判事 玉助 久我之助 玉男、定高、亀松)で披露。

昭和37年4月。　春日村の豆四郎で 因協会賞。
重な役に、頼世、お軽、小浪、およね、お妻、お紺 お光、等がある。

女方なら何でもこなす実力があるが、その動きは お光、お弓、朝顔、等 時代物よりむしろ世話がかったものが良い。
肉体的條件から、今でも足を持つことがあるが、間の良さに感心する。
浪曲、民謡、等、音楽が好きで、この人の楽屋からは、いつもラジオの音がきこえている。郷土徳島の人形指導にも力を入れている。　温厚な人柄。　57才。

5代 吉田 辰五郎

本名、天満徳三郎　明治30年12月28日生
大阪府東南郡出身

近所に堀江座の床世話をしていた人がおり、それについていったのが動機となった。

明治39年9月(9才)　吉田玉松(才延元年～大正15年。後、3代玉造、玉蔵、菅丞相に品があり、弁慶、光秀、等、荒物から女方まで、巾広く活躍。早替り等も得意とした。明楽座 近松座で活躍。文楽座でも人形座頭)に入門。吉田玉徳と名のる。

明治41年2月(11才)　堀江座の番付にのる。
44年5月 打納める迄堀江座に出勤。45年1月からは 開場の近松座に出勤。

大正4年2月(17才)　師に従い 御霊文楽座入座。

大正4年3月　番付にのる。
退座迄の役は 泄添孫八、原小文治、傾城い久松、矢走仁惣太、千女之助、蛇の目の眼八、河左の善六、奴入平、若狭之助、俊徳丸といったところ。

昭和3年12月　筆上4枚目で退座。
後上京して 吉田冠造、吉田徳三郎らと寄席

に出る。

昭和5年5月(32才)　石割松太郎のすすめで、文楽座復帰、太夫で番付にのる。

終戦迄の役は、杉王丸、盆栽の注進、から、京仕、勇五左衛門、佐次太夫、将監、義平次、鉄ケ嶽、勇半兵衛、岩永、玄蕃、といったところ。

昭和23年5月　組合派、(25年8月、三和会と称す)

昭和26年12月(54才)　5代辰五郎襲名、

於、東京三越劇場。鎌腹の弥作、安達の貞任で披露。

三和会の時は、鎌三の佐々木、壁の滝口、金藤次、松王丸、熊公、由良助、師直、光秀、等、他に人もなく、座頭所の役を持っていた。

当年69才。肚はないが、人形の中では最も古い一人であり、老熟というより他はない。義平次等、世話物の一部で面白い味を示す。三和会時代は荒物を遣うがたわら、昔から心得のある衣装や、床山のこともしたという。首等、人形も沢山持っている。古いだけに孫悟空の三宝抜け等、今では演らないものも、よく知っている。

4代豊松清十郎

本名　筒井一雄　大正15年3月15日生、京都市伏見区出身。

父は吉田兵次郎(昭和19年歿、4代小兵吉門下)

昭和13年1月1日(12才)　2代桐竹紋十郎に入門桐竹紋之助の2代と名のる。

昭和14年1月　四ツ橋文楽座の番付にのる。

昭和14年11月　売しげりが初役、於四ツ橋文楽座。久しぶりに入った子供の初舞台というので、2代吉報大夫から祝いの祝を受ける。

昭和18年3月　応徴後、応召。

昭和20年末　復座。

昭和22年11月　釣女の美女で松竹会長賞。

昭和23年5月　組合派(後、三和会と称す)に参加。

昭和28年11月　鷺谷のお妻で大阪市民文化祭賞、因協会賞(39年4月)

昭和34年7月(33才)　4代豊松清十郎襲名、

於、東京三越劇場。

夏祭のお辰、三浦之助、八重垣姫で披露。

三和会時代の役は、お俊、おわさ、宮城野、

お弓、阿曽次郎、戸浪、壷坂のお里、重の井　といったところ。
最近の役は　時姫、新口村忠兵衛、十次郎、判官切腹の頼世、車曳の桜丸、おとわ、夕霧、等。

40才。　まだ修業の厳しかった戦前の文楽で足遣いからしっかり修業した人である。修業の中二段階で　幸か不幸か三和会になった。
勘がよく、人が三年かかるところを一年で覚えるので、昭和16年5月（16才）抜擢されて　子役でもむっかしい坊太郎の役がついた。　師紋十郎も心配して一週間うしろについていたというが、無事に遣った。
久松や勝頼でも品のある芸風である。　今までは　主として女方であったが、玉男が文七や検非違使にゆくと若男や更には源太がまわってくる。本人もそれを遣ってゆく覚悟をし、意欲を燃やしている。　舞台で上って判断を失するのを欠点といえようか。

3代吉田簑助

本名　平尾勝義　昭和8年8月8日生
大阪市北区出身

父は、2代桐竹紋太郎（明治18年～昭和31年　初代紋十郎門下）
5才位から　父の部屋へ出入りして、黒衣を被っていた。
小さな子供であるので皆が面白がって、昭和15年2月　肉弾三勇士の時　人形の軍服が丁度合うところから、それを着せられ　舞台に人形と一緒に並んだ。　漸く気付いた観客が　あの人形は生きていると　笑ったという。
昭和15年6月1日（7才）　蝶の道行が出たとき、差金で蝶を遣ったが、その扱いに非凡なものがあり、それが契機になって　勧められ、　3代吉田文五郎に入門、父の本名辰之助をとって桐竹小辰と皆から呼ばれるようになる。
その後も旅で　菅秀才を持たそうということになったが、まだ小さくて、合う袴がないので、毛谷村の六助の人形のを着て出たという。
昭和17年3月（9才）　桐竹紋二郎と改名。
この名は　初代紋十郎門下にもあり、

昭和18年6月（10才）　太功記、本能寺の三法師丸が初役。

戦前の役は、19年3月　勘助住家の次郎吉、

19年6月　九郎助住家の駒若丸　と三っだけ。

あとは手伝いで、番付にのるのも戦後。

20年8月、酒屋のおつう、10月、こたつの勘太郎。

21年11月、番付が復活した時は、筆下8枚目（9枚目、和夫、10枚目　文昇、11枚目　紋吉）。

昭和23年5月　組合派（後、三和会と称す）

昭和23年8月（15才）　2代桐竹紋十郎に入門。

昭和32年9月　千崎弥五郎で　文楽会賞、

昭和33年1月　信夫で、芸術祭奨励賞。

昭和33年1月　おとわで　因協会賞。

昭和34年1月　三吉で　因協会賞。

昭和35年1月　政岡で　因協会賞。

昭和36年6月（28才）　3代簑助襲名、於東京三越劇場

お筆、朝顔、道行の小浪、で披露。

昭和40年4月　封印切の梅川で　因協会賞。

蝶会での役々、　お筆、お園、操、朝顔、千代、玉手御前、等。

最近は、雛鳥、宵庚申のお千代、封印切梅川、道行の静御前といったところ。

33才。　やはり足から修業の出来た人である。構えも間も良い。

沼津の平作（5代桐竹門造）の足を持っていたとき、悪いというので、平作の扶で、客席からも声が出るほど　舞台でたたかれた。　こうした厳しさは有難かったという。

勘の良い人で　記憶力もすぐれている。　めぐまれた天資に加え、屈指の勉強家で、的確な解釈の上に立った演技には説得力がある。　酒を嗜む。

これからは　役によっては古風な感じ、貫目ある母性愛が今以上にほしいし、立役も勉強してほしい。

吉田 玉昇

本名　徳本 茂次　昭和8年5月9日生
布施市出身.

近所にいた文楽の棟梁につれられて文楽を見た時、八陣の客席まで せり出す道具に興味を覚え

昭和19年2月2日(11才)　吉田栄三郎(昭和22年夭折. 初代栄三門下の逸才)に入門、吉田栄若と名のる, 戦前の番付にはまだのらない。

昭和21年2月 袖萩祭文の仕丁で看板、チラシにあり、21年8月、志賀の里の光丸。(初役)

21年11月復活した番付には 和夫の次の頭でのっている。

昭和22年10月.　栄三郎歿、5代桐竹門造の預りとなる.

昭和23年5月　組合派、

昭和24年6月　廃業.

昭和26年3月　因会へ復帰、2代玉市に入門.
栄若の名で出座.

昭和26年4月(18才)　吉田玉昇と改名、役は小太郎.
於、御園座.　この名は、今小道具に転向した玉米も名のっていたし、以前にも幾人かある。

昭和35年1月　勧進帳の弁慶で 因協会賞.

昭和40年7月18日　吉田玉男門下となる(玉市5月6日死去の後)
最近は、源太勘当の平次、岩代 道生村の金五郎、すしやの梶原、といったところ.

33才.　栄三郎、玉市、玉助に厳しく足の修業を受けた. 左は、玉助、玉市、玉男で勉強している.
昭和34年1月から、37年4月迄 10回行われた若手嫩会では、松王丸、鬼一、渡海屋銀平、熊谷、田七、松右衛門、等を遣った.
まだ脚が落ちつかないが、岩永などは充分一級品だし、最近 極めて貪欲に勉強しており、肚が出来てきたら何十年か先には 嫩会の役々が本役になる人である.
最も期待される若手の一人.
人形の胴の製作なども玉市から仕込まれている. 丸胴も切胴も巧みなもの.

初代 吉田作十郎

本名　小西作十郎　大正9年9月22日生

滋賀県蒲生郡出身.

近所にいた吉田文枝につれてゆかれ、伊賀越を見て、すぐさま

昭和10年10月1日(15才)　吉田玉幸(後、3代玉助、明治28年～昭和40年、3代玉造門下、骨格の大きな芸風で、由良助、光秀、熊谷、盛綱、権太、等を得意とし、人形座頭格の存在であった)に入門、　吉田玉枝と名のる。

12月から見習として、四ツ橋文楽座、入座.

昭和11年3月　はじめて番付にのる.

昭和16年3月～19年8月　兵役.

昭和22年10月限り退座.

昭和24年3月　吉田作十郎の名で組合派(後、三和会)に参加,三和会では、薬師寺、長右衛門、筆助、等を遣っている.

最近は、毛谷村の京極内匠、玄蕃、村上上使の村上、尼ケ崎の久吉、といったところ。

46才。最近、随分積極的である。一寸間は悪いが

一生懸命に役になり切る努力をする人である。

芸風は、時代物の立役に適す.

人形の手や足は、人形細工師の仕事であるが、この人は器用で、コツコツと足を作っている.

吉田 文昇（ぶんしょう）

本名　岡田（おかだ）　登（のぼる）　昭和6年10月30日生

兵庫県津名郡出身

35年6月結婚して姓が変ったが、吉田淳造の養子淡路では人形に関係していない。

昭和19年9月1日（13才）　3代文五郎に入門、文昇（ぶんしょう）と名のる。　この名は、現紋十郎も一時名のっていた。

昭和20年3月、神戸松竹劇場に於ける鶴喜代が初役（本人談、番付未見）。

昭和20年2月迄は番付にのっていない。20年11月、松右衛門内、駒若丸。

昭和21年1月、封印切の仲居であり、

昭和21年11月復活した番付には、栄若の次でのっている。

嫁会では、勘当場の源太や八重垣姫を遣っている。

最近の役は、沖の井、若葉の内侍、市若初陣の綱（つな）手（で）、俊徳丸、初菊、といったところ。

31才。　文五郎の足を遣っては来たが、文五郎が肉体的に衰えた頃なので、やや変則的であったかもしれない。

しかし、一応の基礎は出来ているし、上記の役々を遣って破綻はないが、このところ、やや積極的な向上心に乏しいきらいがある。

芸風は、しっとりしている。

吉田 文雀

本名. 塚本 和男　昭和3年6月8日生.
東京都渋谷区出身.

父は元、証券会社の常務で、後には芝居茶屋に蒲団を貸したりし、初代隠治郎や、3代文五郎と親交があった。　10才頃から楽屋に出入りするようになったが、

昭和19年8月、戦争で人がないので、神戸八千代座で無理に黒衣を着せられた。

初代栄三に入門すべく、杯する前日、栄三宅が空襲にあい、流れる。

昭和20年7月11日（17才）　頭取預けとして、2代吉田玉市の部屋に入り、吉田和男と名のる.（但し番付にはずっと和夫である）

昭和20年9月、　千両幟の大阪屋が初役、　於、南座、チラシに名が出て、学校で問題となり、決心して人形遣いを志す.

昭和22年6月　　3代吉田文五郎に入門.

昭和25年4月（22才）　　吉田文雀と改名

於、四ツ橋文楽座。　役は、十種香の黒衣、御殿の栄御前、

文雀というのは　父と隠治郎が考えた名前だという.

嫁会での役、朝顔、おかる、奥侍局、等々.

最近は、初菊、お染、黒衣、顔世、早瀬、といったところ。

38才。　玉市、文五郎の部屋にいただけに、随分物知りである.

首のことにも詳しく、昭和27年からは、この人が首割りをしている。（出し物が決ると、首を割当てる。原則的には決っているが、太夫の語り口で変えることもあり、鬘について床山との相談もする、平常も、塗りや修繕をはじめ、首の注文もする.）

桜井都座平について舞の勉強をしており、人形にも生かしている。

厳しい足の修業はしてないかもしれぬが、こたつのおさん等、文五郎の代役を勤めた実績もあり、着々と実力を養っている.

一寸かがみ込んで遣う癖があるが、これは正した方が良い。

桐竹 紋弥

本名 林 勝 昭和8年10月17日生
出生は新富町、すぐ大阪西区へ移る。

父は4代玉造（明治18年～昭和23年、3代玉造門下、後、吉田林蔵）20年10月伯父千葉蝶三郎（元、人形遣い吉田半玉）一座に入り、21年迄 子役をつとめる。

昭和22年2月2日（14才） 2代吉田玉市（明治27年～昭和40年、故実にくわしく、枯淡の味で知られた）に入門、吉田玉一郎 と名のる。

昭和22年3月 番付にのる、役は、勧進帳の大刀持、於、四ッ橋文楽座。

昭和23年5月 組合派（後、三和会と称す）

昭和24年9月 2代桐竹紋十郎に入門。

昭和25年6月 桐竹紋弥と改名、於、東京三越劇場、（C.f、1月、玉一郎、6月、紋弥、この間、番付未見）
最近の役、上田村の金蔵、日向島の土屋軍内、重の井子別れの三吉、吃又、修理之助、といったところ。

33才。 まだ落ち着きのない芸だが、やる気を持っており、勉強もしているので今後が期待出来る。趣味、写真。

吉田 小玉

本名 高橋 輝雄 昭和9年5月3日生
大阪市住吉区出身

吉田玉之助が近所に住んでいて、文楽にも来たことがあった。それが縁となって、

昭和26年10月1日（17才） 2代吉田玉五郎に入門、吉田小玉と名のる。この名は 初代玉造門下の玉勢も名のっていた。

昭和27年1月 番付にのる。

昭和27年3月 新吉原揚屋の 禿 が初役、於、四ッ橋文楽座。
最近の役、市若丸、浅香姫、修理之助、三勝、といったところ。

32才。 仲々器用で、舞台度胸もある、首の写真をとって整理する等、几帳面なところもある。
プライベイトな事だが、38年5月、イーディス・ハンソンと結婚、2年3ヶ月後に離婚して話題になった人。

桐竹紋寿

本名　山口嘉彦　昭和9年6月30日生

洲本市出身.

父は、淡路の興行師.

昭和21年4月(12才)より、淡路の女方の人形遣い　引田左鬼次に手ほどきを受ける.

昭和22年3月、淡路の小林六太夫座に参加、小林道之助と名のる.

乙女座に男唯一人で参加、熊谷、十次郎、平作、などを遣っていた.

昭和23年11月には、青山御所で、順礼歌のおつるを遣う.

昭和25年2月27日(16才)　2代桐竹紋十郎に入門.
仮に桐竹紋若と名のって、3月の組合派小倉公演から参加.

昭和25年6月　東京三越劇場で、吉田屋の下男の時から、桐竹紋寿と名のる.
初代紋十郎の門下にもあった名である。

昭和25年12月　菅秀才が初役、於、東京三越劇場.
最近の役は、堀川のおつる、板額門破りの有姫、絹川村の讃岐の局、といったところ.

32才.　現在、紋十郎の足は主としてこの人が勤めている。紋十郎の用事もする傍、師の型をメモしたり、三和会時代も、巡業の記録をしている等、几帳面な人。仲々の飲み手。

2代 吉田玉幸

本名　小西 正義　昭和13年8月27日生.
大阪市生野区出身.

3代吉田玉助の甥。

昭和27年3月1日(14才)　3代吉田玉助に入門.
師の前名を名のる.　大低の人がそうだが、修業が苦しくて一度ならず逃げ出す.

昭和27年4月　番付にのる.　寺子屋の菅秀才.
於、四ツ橋文楽座.

昭和39年.　師玉助の養子となり、小西家に入る.
(旧姓.江島)

昭和40年4月20日　玉助の死後、遺言により吉田玉男に入門.
最近の役は、堤軍次、新口村の捕手小頭、花ヶ崎の正清、小金吾討たれの猪熊大之進、九郎助住家の矢走仁惣太、といったところ.

28才.　主として玉男の足を遣っているが、玉助に仕込まれているだけに、立役の足を持っては一番しっかりしているのではないか、最近は人間的にも変ってきた。社会人としての自覚と、芸がわかってきたからであろうか。　将来　伸びる人である。

桐竹一暢

本名　岩田 孝一　昭和13年12月22日生
大阪市西成区出身.

父は、現.桐竹亀松.

昭和30年10月10日(17才)　父の門下として入座、桐竹亀五郎と名のる.

昭和31年1月　吉田屋の末社の役で番付にのる
道頓堀文楽座.

昭和31年2月　桐竹一暢と改名、役は同じ.
於、甲部歌舞練場.

昭和31年5月　野崎村の下女のおよし、が初役.
道頓堀文楽座.
翌月、東横ホールで、菅秀才.
最近は、順礼歌のおつる、御殿の千松、袖萩祭文のおきみ、九郎助住家の太郎吉、等、主として子役.

28才。　父は芸道の苦しみを知っているから反対したが、本人が好きで飛込んだ、一通りわかってきたし、そろそろ子役を脱するので、これから厳しく仕込むと父はいう、素直な芸風で随分凝り性。伸びる人である。

桐竹小紋

本名　長谷川昭　昭和2年9月7日生
大阪市浪速区出身.

父は芝居の雑子方であった.

昭和15年4月1日(13才)　2代桐竹紋十郎に入門.
小紋と名のる.
明治27年9月　稲荷座に　この時一興行だけ小紋の名がある.

昭和15年6月　四ッ橋文楽座の番付にのる.

昭和16年12月　寺子屋の菅秀才が初役.
於. 新橋演舞場.

昭和20年8月　応召. すぐ終戦.

昭和20年10月　出座.

昭和23年5月　組合派. (後. 三和会)

39才.　目立った活躍ぶりではないが. 左や足. それに新口村の講中参りや. 脇ヶ浜の百姓等. ツメ人形を黙々と勤めている。こういう人の蔭の力も見のがせない。昔は左遣いの名人とか. 足で卓越した技倆を示して一生を終った人が多かったが. これも舞台人として立派な生き方だと思う.

吉田玉之助

本名　森義雄　昭和2年10月12日生
大阪市東淀川区出身

2代桐竹政亀が隣りに住んでいた、その手引きで、

昭和18年4月1日(16才)　3代吉田玉助に入門.
玉之助と名のる. この名は　初代玉造門下等に2. 3人ある.

昭和18年10月　はじめて番付にのるが. この興行中. 徴用.

昭和23年6月　シベリアより帰り.

昭和23年7月　南座より出勤

昭和24年3月　すしやの善太が初役.
於. 四ッ橋文楽座.

39才。　黙々と舞台の手伝いをしている. 実盛や流しの枝の馬など. 主としてこの人が入っている.
文楽協会発足直前. 文楽の興行が少なくなり. 廃業した若手が多かったが. この人は. 家庭劇の小道具でアルバイトをしながらも. 文楽を離れようとしなかった.
こういう人の蔭の力も. 文楽には不可欠である.

桐竹 勘寿（かんじゅ）

本名　野坂（のさか） 恒男（つねお）　昭和２０年４月２４日生.
大阪市西成区出身.

喜左衛門夫人の世話で、太夫か三味線か人形に成るべく　見に来たが　人形の面白さにひかれて.

昭和３０年８月２４日（10才）　２代桐竹紋十郎に入門.
桐竹紋次（もんじ）と名のる.

昭和３１年２月　三和会第三回若手勉強会での.
本下（ほんしも）の下部（しもべ）、宿屋の下女お鍋（なべ）が初役.
於、東京三越劇場.

昭和３８年４月　退座.

昭和４０年６月　２代桐竹勘十郎の門下として復座.
紋次の名で小公演に参加.

昭和４０年７月　桐竹勘寿と改めて　道頓堀朝日座出勤.

昭和４０年１０月　祇園会館での　重の井子別れの調姫、酒屋のおつうが　復帰後初役.

２１才。　明るい性格で、先輩から可愛がられている.
素直にのびてゆきそうである。　とにかく修業次第.

吉田 福丸（ふくまる）

本名　永野（ながの） 忠男（ただお）　昭和１６年４月４日生
大阪市南区出身

父は貿易関係の仕事をしており　３代玉助の顧問であった.後、事業に失敗、玉之助の世話で.

昭和３０年６月７日（14才）　吉田玉男に入門.
吉田玉丸（たままる）と名のる.　この名は以前にも　幾人もある.

昭和３０年１１月　こたつのお末（すえ）が初役.
於　新橋演舞場.

昭和３１年１月　道頓堀文楽座の番付にのる.
役は、酒屋のおつう.

昭和３６年８月　廃業.

昭和４０年４月　復座.

昭和４０年５月　福丸と改名して、神戸国連協会主催の小公演より　再び黒衣を被る.

昭和４０年７月　和田合戦の公暁丸（こうぎょまる）が、復座後初役.　道頓堀朝日座.

昭和４１年２月　２代栄三の預りとなる.
最近の役は、菅秀才とか、勘太郎といったところ.

25才。　玉男の教えで、とにかく立役の足は持てるようになった。
大部屋にいたが、2月から栄三の部屋に入る。行儀から、舞台のこと迄、厳しく教えられることだろう。

吉田 国秀

本名　豊田 穀栄　明治24年12月18日生
兵庫県三原郡出身

13才頃　淡路、吉田伝次郎座の小道具に関係、一時止めて、16才頃、又伝次郎座、次いで淡路、上林源之丞座の小道具。これは人形を遣う迄の基礎訓練であったという。
明治41年(17才)　愛媛県巡業中、芝六住家の三作で初舞台。　名は豊田穀栄。
その後、吉田伝二郎座。　上村源之丞の福禄組、源之丞の大黒組、　小林六太夫座、　市村六之丞座、等、淡路の各座に加入。
昭和5年から終戦迄は、桐竹門造の乙女人形の衣装係をし、時々は小兵吉の一座で遣い、戦後は、又淡路、徳島の各座で遣う。
昭和23年11月、青山御所で　順礼歌のお弓を遣った。
昭和25年11月(59才)　文楽三和会に参加。
尼ヶ崎のさっき、吃又の将監の奥方、合邦の女房、等で手堅い老役振りを示す。

75才。　淡路では、肥後駒下駄の海老屋のお房、厳流島、岩倉屋敷風呂場の宮本武蔵、尊那ケ嶽の老女等、女方も立役も上手として名が通っている。中心となる存在。文楽では不遇な淡路系の人々の中では、一番シンもあり、味もある。

講談本等をよく読んで、浄瑠璃にも出てくる人物の勉強をしている。

盆綱陣屋の微妙で住大夫にほめられたこと、紋十郎の良弁に、渚の方で相手をつとめたこと等を名誉に思っている好々爺といった感じ。

吉田兵次

本名　小林虎市　明治16年8月1日生

兵庫県津名郡出身

12才頃より淡路小林六太夫座の人形遣いとなる。

明治35年8月1日(19才)　5代吉田兵吉に入門、吉田虎市と名のる。

明治35年12月　ほりへ明楽座入座、36年1月瓦解。

明治41年4月　虎市の名、堀江座の番付にのる。(堀江座38年9月開場)

明治42年4月(26才)　吉田兵次と改名　役は沃濃姫他、於、堀江座。(但し番付は兵治、翌月より兵次)

筆上4枚目位の位置で　竹屋姫、原小文治、赤蘭丸、油屋の久松、等。

明治44年1月　帰郷、淡路の六太夫座。

明治45年1月から　近松座、出勤。

役は、采女之助、俊徳丸、志津馬、等。

大正2年1月～大正5年12月　淡路小林六太夫座。

大正6年2月(34才)　竹豊座、入座。

筆上4枚目で　久松、久吉、判官代輝国、滝衣、

市若初陣の浅利与市、本下の伴左衛門、陣屋の義経 等、華麗たる役々。

大正8年4月　吉田文三の弟子として、吉田文治の名で 御霊文楽座へ出座。

大正9年3月より、兵次の名で竹豊座出勤。筆上2枚目。修理之助、おたね、八陣の時姫、等。

大正10年3月　又、御霊文楽座、出勤、番付の名は、吉田文治（文次）

大正14年5月（42才）　吉田兵治の名に復す。御霊文楽座。

これからは、忠臣蔵でいえば、種ヶ島の六とか三人侍、勧進帳の四天王、沼津の安兵衛、盛綱の二度の注進は良い才で、奴、左屋、歩行、取巻、等が持役になってしまった。

終戦後は、因会に属し、人が少くなり 年功で、帯屋のおとせ、作九太夫、岡崎の幸兵衛女房、瓦ヶ崎のさっき、十種香の長尾謙信など、主として老役を持ってきた。

83才。今では何だか、65年間ずっとツメを進ってきたような感じがする。

兄が初代紋十郎の門下で、桐竹紋五郎（昭和3年没、51

才）といって、口上を勤めていたので、その後後、40年近くも口上を勤めている。実にすっとぼけたような飄々とした味わいがある。時々間をはずすが、この人の打つカゲも、今では文楽の味の一つである。

堀川の猿なども、この人の手にかかってきた。

昨今は、ほとんど目立った役は持たず、大儀そうに、若い人の左でついて回っている。

死ぬまで口上をやりたいと、その口上と同じような飄々とした口ぶりで話している。　勲章はうれしい話だ。

吉田 淳造（じゅんぞう）

本名　小林（こばやし） 藤一（とういち）　明治30年1月2日生.
兵庫県津名郡出身.

父は、淡路の小林六太夫座の座元（ざもと）で、小林菊五郎だという。

明治41年2月5日（11才）　一座の若竹藤吉（わかたけとうきち）に師事、名は小林藤一、その後、修業の為、上村源之丞座、吉田伝二郎座へ入り、20才頃、小林六太夫座へ戻る。

22才の時、兵役。　その後は、又、六太夫座。

昭和8年3月（36才）　四ツ橋文楽座に入座、吉田藤一と名のる。

昭和8年5月　番付にのる。　藤市、10月から藤一になっている。

昭和14年1月　番付では、藤一改め、奈良吉とあるが、これは伊勢の人で別人。　本人は17年5月迄　淡路。

昭和17年6月　吉田藤一の名で　再出座。
文楽での役は　百姓、取巻、下女、等である。

昭和23年6月　吉田登一（とういち）と改名。　於、中座。
役は、やはり、逆櫓の富蔵、　忠臣蔵三人侍、
重の井子別れの本田弥三左衛門、引窓の三原伝蔵

といったところ。

昭和28年2月　吉田淳造と改名.
於、京都弥栄会館

69才。　淡路では、熊谷、忠度、等を持って、屈指の達い手である。

淡路の人形と文楽とでは、首の大きさ、胴串の長さ、その角度の違い、洗練のされ方、芸に対する考え方、等、色々違いはあるが、淡路から出て、名人の名を得た人もあり、一体にその人の態度如何であろう。

吉田 常次

本名　小林 常夫　明治28年3月28日生
兵庫県津名郡出身

明治45年頃(17才)　淡路の上村源之丞一座に本名で入座。
昭和5年頃、吉田常次の名で、四ッ橋文楽座に出勤したというが、番付には出ていないので、裏付はとれない。
昭和16年3月　2代吉田玉市の弟子として、四ッ橋文楽座、出座。
昭和17年10月　番付にのる。
これといった役はない、尼ヶ崎の正清位が名のある役で、腰元、近習、町人といったところ。
昭和21年～昭和24年　淡路。
昭和25年2月　名古屋公演より、文楽因会、加入
現在に至る。

71才。　淡路では、お弓や相模、政岡、等を持って
座指の達い手。
33年4月、ソ連にも行っている。

吉田 菊一

本名　吉川喜久一　明治22年11月11日生、
兵庫県三原郡出身

明治36年秋(14才)　中村久太夫一座に入座、淡路で最もすぐれた人形遣い、父吉川錦玉に師事、吉川錦若と名のる。
大正3年1月(25才)から、大正3年6月、吉田菊市の名で、近松座に出勤したという。(大正3年2月のみ番付にのっている。)
そのあとは、上村源之丞座に参加。
昭和34年2月　文楽三和会に加入、桐竹菊一、35年から、吉田菊一と改め、現在に至る。
役は、重の井子別れの宰領、とか、阿古屋の水奴、雲屋、等。

77才。　淡路では、忠度、奥州秀衡の秀衡、戝ヶ嶽七本槍の片桐且元、等を持って、座指の達い手。　文楽では不遇な立場にある。
ツメとか、人形の番数の多い段の軽い役の左要員といった感じ。

その他

文楽に不可欠のもの ―― 有衣、見台、三味線、撥、駒等の製作、床本を書く人、皮をはりかえる人、人形細工師、等も、皆程多くはないかもしれないが、以下は、文楽協会所属の人々で、こうした人達の陰の方も文楽を支えている。 みんな文楽を愛する心に変りはない。

○ 衣裳

森井太一郎　　明治41年2月3日生

新派の女方をしていたという変り種。

戦後 衣裳に関係する。衣裳に関しては流石に詳しい。常に倉庫の衣裳を整備し、汚れたものや、破れたものは補修、公演の演目が決ると揃えて、無いものは考証して染めさせ、仕立てる迄が仕事。

石橋　修　　昭和11年7月17日生

撮影所の仕事を志し、松竹に入社したが、松竹衣裳の事務を当てられ、その後、衣裳係となる。

38年4月より、文楽協会で衣裳にたずさわる。

○ 首

菱田　宏治　　昭和11年6月20日生

昭和27年、故由良亀に入門。 彫刻名、由良宏。

仕事は、首を打つこと、と、ぬりかえ、修繕が主、既に25番位打っているが、現在文楽で使っているのは、与勘平、お福、娘の三番。 あとは、かざり物になった。

それは見た目の完全さだけでなく、胴串やノドキの具合が、実際人形遣いの手に合うかどうかによる為である。

玉市や文五郎には随分教えられるところが多かったという。

（細工師には 鳴門在住の 大江已之助がある）

○ 鬘

名越　昭司　　昭和5年4月21日生

叔父が鬘屋で、母が髪結いをしていた。

昭和26年、この道に入る。 首割りが決ると、それに、髪のついた台金を打ちつけて結い上げる。興行中も結い直す。これが主な仕事。

40年12月に、女性の髪形の変化と、中

国から林熊の毛の輸入がとだえたのとで、長い黒い髪が不足と新聞に出た。今だに売込みや、寄贈が多く、悲鳴をあげている。

○ 大道具

松尾 嘉彦　　明治37年5月16日生。

昭和12年から大劇の大道具にたずさわり、昭和20年から文楽で仕事している。道具帳を作り、平面図を引いて製作する。公演中も、建込み、障子の開閉等、忙しく動いている。

○ 小道具

米谷永次郎　　明治44年10月16日生。

昭和5年、4代玉造に入門して吉田玉昇と名のり、人形遣いであった。昭和13年退座。30年、2代玉市門下として、吉田玉米の名で出座。

38年4月、文楽協会発足から小道具係りとなる。人形遣いであっただけに、小道具にも詳しく、使い良い状態等もよく知っている。

昭和40年10月から、松竹映画に居た吉川弘邦（明治40年生）が加わる。

○ 床世話、舞台係

太夫の見台、三味線、人形の舞台下駄の世話。巡業の時は、荷物の世話に当る。

山森定次郎　　明治42年生。この道40年のベテラン。

長谷川喜一　　明治35年生。25年になる。

鈴木幸次朗　　明治36年生。15年前、三和会の世話から今日に至る。

鎌田 英助　　明治44年生。5年前三和会より。

○ 楽屋頭取

細井幾太郎　　明治30年生

楽屋や巡業の時の宿屋等の部屋割りをはじめ、色々の用事をする。

楽屋口に頑張っていて、楽屋の把握をしている。

○ お囃子

望月太明蔵社中の望月太津八郎等が勤めているが、やや疑問の点もある。つまり、歌舞伎や、舞踊の影響が強いのではないか。

文采の人々 訂正 補修

- 御手数ながら御訂正いただけますか。
- いろいろ御教授の点御教示下さい。

P2 目次 野沢鯨糸 → 野沢錦糸
P9 明治34年 油屋は伊勢音頭の油屋。
P18 料亭左の妹 叶美大夫は現在ホテル 勝之輔は戦死
下から二行目 料亭左は13年4月迄
P23 明治34年3月 浅草来演の時 吉之助が入門させてくれた
P32 3行目 4行目 文楽
第1行目 3代情吉 → 4代情吉
P41 4行目へ 文は料理屋、文母 共義太夫を好み
7,8才から習いはじめ 18才頃から---
P46 5行目 善文 藤沢七安 → 祖文
P50 12行目. 書籍商をしながら〈高田とぼけの名で素人大会に
出場 大正11年安達一つ家で入賞したりしている(宋文回顧)〉
豊沢団左の弟子だに強く.
P65 大正12年11月へ の項 現文字太夫 喜夫 → 喜辺
昭和14年6月 料亭義座解散 → 13年4月
P68 5行目へ. 文は元来義竜鶴。 第は實方後伊八 早世
✓ P72 大正7年11月 義士物之伝 〈呂太夫 弥七殺場〉 年頃あるが---
この時 竹豊名の為はいのる.
大正8年1月 洪消
✓ P87 6行目 3代野沢勝平に入門 は 先代(つまり2代)の誤
P101 3代豊沢 後ニシ 改名の摺物には5代となっている.
3代が正しいと思うが?
P102 3代 野沢ニシ 2代 (髪元の摺物 2代. 外れ2代目
なので 2代が正しいと思う)
4行目へ〈堀江の"富の袁"の主 富沢富治郎が文〉
(大正6年1月12~14日 堀江座にて 摺鹿海苔会開催
嘉夏より 摸倣一文字等沢山で充分引きつ 連日大盛況
天稟の芸才と鍛錬の成果 麒麟児として目される人達
——海苔学徒 読者——

P106 内海繁太郎氏のこと 敬称
・8才の時 幕臣左の連れ 竹本雛大夫一座へ 出田嘉松
の名で入座
・14才生徒のあと 中村駒之助の弟子となって中村駒之助と
して改称 級の子役
以上の誤りあり. 年代 合わないところもあり
本日 傳朝孫 たしかめる.
P130 10行目 舞事に書いたは 無事のミスプリ